こゝに一人あるらしいよ』

『や、こン畜生、いよ〳〵腕づくだ、覺悟しろ』

『殺すと化けて出るよ、痛が付くと膏藥代が入るよ、際があッたら喰ひ付くよ、其方で覺悟して來るが宜い、沒理漢め、くれろとは言はない、出來るまで待てといふンだ、土でも擔いで働ける身體が家賃の半月も溜りやア、少しは氣の毒と思ッても見てやるが、眼前に子も孫もない六十五の老婆一人を七日の滯納で叩き出すの追出すのと、よく言へた、覺えてろ、手前も前途の短かい奴だ、どうせ冥途の旅で出喰すから其時この世の仇敵を討つぞ、他の事を引合に出すでもないが、この長屋にやア血氣の大の男が三人も揃ッて、ごろ〳〵してる奴があるぢやアないか、其奴の溝でも浚ッてから來れば格別だ』

『餘計な御世話だ、あの三人の書生ッぽア昨夜、四日の家賃を踏倒しただけで、どッかへ引ッ越して仕舞ッたい、うぬと逆ッて今日から面倒のねエ空屋だ』

壁一重の鄰屋に斯くと聞きし瀨田とよ子、あッと驚いて松坂あさ子もろとも、呆れしまゝの顏を見合はせぬ、

車代として持歸りし三圓のうち二圓を手に入れしのみ、一週間の後あらためて出直せば尠くとも百圓、たしかに外さぬといふ、その一週間さへ來ぬ三日前、その吉川實が二人の同類もろとも一言も殘さず、唐突の不意に忽然として鐵砲玉の如く、いづれへか飛去りしと聞くや否、あッと驚きし瀨田とよ子と松坂あさ子、なるほど今朝その戸口を見れば、今しも鄰屋の大談判お虎婆と喚き合ひし鬼家主が、べッたりと貸屋札を貼ッて出行きぬ、

『瀨田さん、どう仕たンでせう、變です事ね』

『眞實よ、變ですよ、あれほど固く約束を、妾等へ固い約束よりも事實、現在、自分の身に取ッても一所懸命になる筈の利益問題を捨てゝさ』

『いくら考へても妾、考量が付きませンよ、つまり當世紳士の勢ひで、内々そッと手を廻して、過間の一件を或方面から探りにでも來た爲でせうか』

『もし萬一、あさ子さン、それなら妾等の方へも何とか、響きますよ、さうでない以上あの日三圓といふ車代は妾等への申譯で、實際その外に幾何か取れるだけ取ッて仕舞ッて、もう後に利益が無いと見拔いたかも知れませンよ、あまり不意で、矛盾で、少しも前後の事情が一貫して居ないンですもの、事に依ると此方が却ッて利用されたンですよ』

『あら、口惜しい事ね、瀬田さン、この上、どう仕ませう』

『どうッて、もし全然、利用されて仕舞ッたとすれば、いくら口惜しくッても、あさ子さン

もう無效よ、まさか妾等が直接、出直して押掛けられませンもの、それこそ危險ですよ、學校時代でさへ、あれほどの墮落を巧みに祕密の穴へ葬り終せた女ですから、今日の地位からは自分の境遇を守る必要上、妾等へ對して苦しまぎれに、どんな意外の防禦策を講じるかも知れませンよ、最初の一著を仕損じた上は、みす〳〵殘念でも暫時、あさ子さン』

『だッて、あまり此まゝでは妾、遺憾に堪られませンわ、何とか手段を變へて、工風のないもンでせうか』

『あッても、妾等では、もう效を奏しませンよ、ですから、こゝ三月の間、何とか外に思案して、糊口を凌いで、あの情人達が無事に社會へ出て來た上、その時こそ、あさ子さン、妾きッと今日の遺憾を倍數にして報える決心なの、根岸ばかりでなく、無論、あの吉川の奴に對してもですよ』

『それまでの糊口を瀬田さン、貴嬢どういふ道があッて』

『そりやァ、また別に何とか、あさ子さン、耳を、ちよいと耳を』

『おやッ、まァ瀬田さン』

『ホ、、、これが妾の第二策、さう難聞でもなくッてよ』

大隈は却ッて市井の巷にあり、大雅は寧ろ俗臭の間にありとて、ます〳〵其後の神韻縹渺たる山口星影先生、天下後世を驚かすべき大詩編を今この乞食小屋に等しき八軒長屋の奥より產出さんがため、頻りに清く尊く高尚幽玄の筆を執りぬ、

故郷の空に一反の田地を底なき無壹蔵の金穴と心得、燒芋の薪と麪麭の屑に空腹を抱へて、神に近き靈魂よりも五體まづ次第に人間を遠ざかり行かンとせしが、幸ひ文雅堂の主人に前後二十餘圓の原稿料を送られて、以來こゝに米の飯を喰へば、元來が蒲柳の質でもない身體、ほッと雨夜の雲間に朧月を見るが如く、やう〳〵人並の顏色を現はし來りて、いつしか聲まで亡者の音を放れ出しぬ、

『先生、これから出かけますが、何か御用がありやァ嚊アが居ますからね、ふンだンにコキ使ッて下せエ』

鄰屋の熊公、車夫著に草鞋履のまゝ差覗いて喚けば、筆を挿みし片手に苦心慘憺の煩杖ついて剝げたる一閑張の机に對ひし星影先生、例の眼鏡越に音なき護謨人形の如く振返りぬ、

『ハ、ァ、もう出ちれるかね、や、なか〳〵の勉強だ、僕も奮勵一番、今日こそ大に筆を執るよ』

『いくら稼ぐ氣でも、客が無きやァ無效ですよ、同じ人間を乘ッけると思やァ癪に觸ります

から、其日々々の運を乘ッける氣で出るンでさァね、ところが、此運といふ奴、さう注文通りに乘ッてくれまンからな、ぼンやりと一日、うぬが尻を蹴込へ落著けたまンまで、あぶれて歸る日が多がすよ、ハヽヽヽ』

『こりやァ面白い、實に妙だ、其まゝ一個の文を成してるよ、加之も名文だ、人を乘せて車を曳くでなく、その日の運を乘せて曳くとは頗る妙だ、自然に一種の人生觀を吟じてるよ、もし品質を評せば所謂る工藝を離れ匠氣を脱して野に咲ける草花の美なる如きもンだ、取るに足るね、いかにも捨て難い、幸ひ僕が其感想を美文の修辭法で、車夫行といふ一篇を起して見よう』

『先生、いくち何でも車夫公は酷い、やはり呼馴れた熊公にして下せエ、すぐ營業が露骨に分ッて困りますよ、餅屋だからッて、おい餅公は感心しませンからなァ』

『ハヽヽヽ、ます〳〵面白い、是また喜劇中の一警句だ』

『四月中の一件ですッて、忘れましたよ、どンな事がありましたッけね』

『いよ〳〵妙』

『なるほど、横町の妙見樣が燒けましたね、驚きましたぜ、あの時もし風が變りやァ、この一蓮托生このまゝの黑焦だ、危ねエこッてしたよ

『殆ど應接に遑あらず、實に滑稽の極だね、はヽヽヽ』

熊公が無邪氣の滑稽に、流石の詩人先生も思はず鼻頭の眼鏡を落して吹出しながら、また其うちの自然美に感歎の極、いよ〳〵今日は車夫行の一篇を起さむとする折しも、文雅堂の店員中にて小才の走廻る二十二三の男、實は文士の催促係なり。

『先生、今日は』

『や、文債鬼また襲ひ來ッたな』

『ハ、、、、文債鬼また襲ひ來ッたは酷う御坐いますな、ちよいと其邊まで淺草まで用事がありましたから、ついでに橋を渡ッて伺ひました』

『主人ます〳〵健在かね、おひ〳〵店の方も盛大に繁昌だらう、兎も角も當時、まづ洛陽の紙價は文雅堂に依ッて高しだからね』

『こりやア先生お世辭で、恐れ入りますな、もし文雅堂が盛大に繁昌すれば、つまり諸先生方の御盛大になッた結果ですから、書肆は取も直さず文士方のメートルに等しいもので』

『なか〳〵うまいね、ハ、、、、しかしメートルの狂はないやうに仕てくれないと困るぜ、いくら利益上の營業でも他の營業と違ッて、そも〳〵書肆なるものは性質に於て半以上、人類の發達を導くべき高等營業だ、徒に愚劣なる卑近の俗書ばかり多く賣ッて、料理屋や遊廓の引札めいては實に慨歎の至極だ、惡田に毒草の苗を植ゆるが如しだからね』

『へェ、いや眞實で御坐います、ですから主人も、わざ〳〵著者の多い中で、殊更先生のやうな方に願ッて』

『無論、その意に感じて僕も筆を執り始めたのさ、實は此まよ尠くとも十年は世に出さない決心だッたよ、天下いまだ僕を知らざるより寧ろ僕の詩を解し得ないからね』

『ところを先生、まけて何卒、天下の俗物どもに解し得らるよやう、讀ンで分るやうに願ひたいンです、つきましては、いかゞで御坐いませう、もう一月の餘にもなりますから、定めて原稿は』

『どうして、まだ十分の一も出來ないよ、全體、さう早く出來る原稿を文雅堂は僕に望むの

かね、さうぢやあるまい、第一この僕は原稿料に依ッて筆を執らないからね、もし僕の文字を金錢で買はうとすれば、一枚の草稿は文雅堂の財產を傾け盡くしても足らないよ、山口星影といふ一個の詩人が文雅堂といふ一個の書肆より出版するものと思ッては不可、つまり不換金の國寶に等しいものだからね、早く書いて早く賣ッて早く算盤珠に利益を認めンとすれば、宜しく他の文士に依賴すべしだ、僕の著は後世、僕の銅像が自然美の結晶體に依ッて築かるゝ時、始めて驚くべき價値が出るンだ

『ヘエ、なるほど、先生の銅像が出來るまで、ヘエ、なるほど、いや主人へ其邊を篤と念のため申聞けますが、實は主人も內心、覺悟して居るかも知れませンよ、先生の原稿料その他の出版費用に限ッて、收支決算の嚴しい店の帳面には一切、記入して御坐いませンからな』

『や、文雅堂の主人、話せるわい、案外の俗物でもないね』

『ところで先生、國寶の御脫稿は、いつ頃になりませうか』

『まづ三年だね』

『三年、先生、一册で御坐いますよ、百四五十ページの原稿が三年と仰しやるンですか、三年』

『一日一行づゝの割合で一年三百六十五行だ、一ページ十五行として二十四ページ餘になるから三年で七十何ページ、いや三年で出來ない、六年かゝるよ』

『えッ、六年、しかし先生、失禮ながら原稿料、いや御謝禮は過間、差上げました二十五圓の外、もはや差上げ兼ねますが、御承知で御坐いませうな』

『安心してくれ、故國に無盡藏の不動產があるよ、ハヽヽヽ』

文雅堂の店員、固より文士の催促係に選ばれて走廻るほどの男、あらゆる文壇の大天狗中天狗小天狗より木葉天狗の鼻息にまで剛れきッて、いかな暴風雨にも吹飛されぬ奴ながら、山口星影先生には流石に驚いて平生の勇氣もなく、あッと呆れしまょ一散に遁出しぬ。

銅像と國寶と六年の連發銃を喰うて、生命からく〳〵文雅堂の店員が飛出せし後、そッと差覗くは例の瀬田とよ子、衣類は何とせン方もない其まょながら、久しぶりの湯に入りて身の垢を洗ひ落せば、元來の色白丸顔、面ばかりは女めいたり、

『先生、大變この頃は、頻に御勉强ですね』

『先生、大變この頃は、頻に御勉强です事ね』

あまり親しく交はらねど、わづか六尺を隔てょ朝夕に顔を見合はせつょ、もし雙方より伸せば手と手を握り合ふべき間柄、星影先生、俄雖にもなり得ず振返りぬ、

『ハ、、、、別に際立ッて、勉强するといふでもないですが、已むを得ず、或書肆に迫らまれしてね』

『おや、御著述ですの』

『困りますよ、折角こゝに隱れて居たのを、つい見付出されて、つまり書肆のために致される結果ですからね、ハ、、、だが賣文の徒に陷らないだけで、自から慰めて居ますよ』

『いくら隱れて居らしても先生、海の中の眞珠は、どうせ世の中へ無理に出されるもので御坐いますよ、ホ、、、』

『海の中の眞珠、や、この長屋で他の者より聞く事の出來ない言葉です、やはり教育が言はせるンですな、ハ、、、まア貴嬢、お上りなさいよ』

『御免あそばせ、何、妾ともに教育が、しかし先生、もし御寸暇な時でもあッて居らして、

お蒼蠅くない節は、妾どもに解し得られる程度で、をり〳〵御高説を伺ひたう御坐います事よ、實は以前から絶えず常に、さう思ッて居りましたのですが、あまり失禮だと存じて、願ひ兼ねましたの』

『ハ、、、、かうして筆は執ッてるもンの、なァに暇があッて、差支のない人間ですから、をり〳〵説の奈何に關せず、語りませう、語ッてもほかの奴は分らないで困る、ハ、、、ハ』

『あら、嬉しい事、先生、是非、伺ひますよ』

『よろしい』

『早速ですが先生、妾、どう考へても考へられないで、迷ッてる事が御坐いますの、たゞ一言にいへば何でもないやうですが、研究すればするほど猶さら其理を失ッて、ます〳〵解釋に苦しむ事が御坐いますの、ホ、、、』

『は、ァ、どういふ事ですな』

『先生、これは事實の上よりも妾、詩的の御解釋を願ひたくッて』

『詩的、こりやァ面白い、何です』

『戀』

星影先生、豆鐵砲を喰ひし鳩の如く、たゞ眼鏡越に眼球ばかり動かして、ぱち〳〵と光らせぬ、

文雅堂の店員は星影先生のために驚いて逃出せば、星影先生は今この瀬田とよ子のために驚かされて、不意の眞正面より戀の解釋を迫らるゝや否、あッと辟易の體、

されど事實の上よりも詩的の上に於てといふ、その詩的の二字に聊か力を得て、加之も答へ

ずンば何とやら却ッて我程度を示すが如く、戀を卑近の醜態外に知らざるかと思はるゝ苦しまぎれに、わざと容を正して悠々と說出しぬ、

『この長屋中で、もし外の者の口より出れば、單に所謂る世俗の戀で、男女肉交的の言葉として聞きますが、教育ある貴嬢の口よりは淸く尊き神聖の戀として聞きますよ』

『あら先生、さう仰しやらなくッても、ホ、、、』

『いや、この戀の解釋は、語るものゝ人物次第で雲泥の差を生じますからね』

『眞實で御坐いますよ、妾も、先生でなくッて、外の人に』

『さうでせう、さうありたいです、ところで、戀、これを僕の所信から說き出すと、凡そ今日の社會には殆ど皆無ですな、當時の詩人に詩なきが如く、戀するものに戀はありますまいよ』

『先生、もし、ありとすれば、どういふのが戀、其ものゝ本體でせう』

『さやう、まづ獸類鳥類その他の動物一切と、よほど遠く高く違ッた點が無くては叶ひませンよ』

『おや、今日の人間は鳥や獸と、さのみ違ッては居りませンの』

『まづ同じです、殆ど同一轍です、たゞ鳥獸の類は交接の期節を限られて、人間は交接の時期を限られないだけの事で、數の上に多少長短の差あるのみ、つまり行ふの事實に於ては同じ理ですよ、しかし人間は、一方に特殊の伎能を與へられたる鳥獸よりも比較的、すべての萬事に智力が行渡ッて居ますから、この肉體の交接に就いても種々の能書を附して、僧侶が木像の佛體に不思議の靈魂あるが如く說敎すると一般、いろ〳〵の讃美歌を以て他を迷はし自己また迷ッてるンです、なゞに僕の理想に照らせば、今日の人間に戀といふや

うな高く貴いものはありませンな、皆これ虚偽の戀です』

『しかし先生、人の最も避けて恐るゝものは死で御坐いませう、それに先生、その死を喜び迎へて戀のために現世を去るものが御坐いますよ』

『ハ、ゝゝ涙管の曲ッた凡俗の同情に、所謂る獻身的の愛と稱せらるゝもンでせう、男女癡情の果に死を招く心中でせう、なるほど戀を一時の獸慾に供して、無事息災に生きながら相別るゝものに比して、少しは憐むべき點もありますが、かの稽倡の說教に隨喜渴仰の涙を流して佛體の前に身を捧げる愚夫愚婦と同じ結果で、その佛體に靈魂ない以上、その戀が神聖でない以上、やはり無效です、そも〳〵僕の說に於ける戀なるものは、さういふ手輕な世の中の都合上で、汚れたる人間の自由自在に左右し得べからざるもンです』

雨口影星先生、年齡ごろに二十九歲、そも〳〵生まれて女なる者を談話の外に知るや否や、その邊は偖置きて、始めの辟易にも似ず、いよ〳〵人間放れの戀を神々しく說出しぬ、

『今いふ通りの理で、僕の戀なるものは今日の世間、到るところ滔々として懸河の如く行はるゝ戀、その輕便なる情慾的の作用とは天地の相違です、つまり今日の世態人情では到底僕の理想に於ける戀は容易に得られませンよ、但し一言、斷ッて置きますが夫婦は戀でない、どれほど圓滿な夫婦でも、いかに愛情の溢れた夫婦でも、僕の所謂る戀には入られない、ありやア社會の組織上、人類繁殖の必要に應じただけの事です、だから戀なるもの、ます〳〵別に淸く高く稀に珍なる所以で、なか〳〵叩りに雨の如く人間界へ下ッて來ませンよ』

『して見ると先生の戀は、迚も人間として出來ない戀で御坐います事ね、圓滿な夫婦も戀を遂げたものでないとすれば、事實、この世の中には無いもので御坐いますね』

『まづ、其邊です、この不完全な世の中に容られて、この不節調な人間の自由に出來得る事が、どこに神聖を保てますか、神聖とは物質の外ですよ』

『では先生、戀は理想に止まるもので、どうしても到底、行へないンですか』

『行へない、行はれる戀は神聖の戀でない、手に取ッて行はれないところが、卽ち戀の神聖にして美の極なる理由で、いかに精巧を極めても自然の花は人工で出來ますまい、この良衣を奈何センといふ清風明月に等しいもンだ、假令ば我を忘れて心も空も寄渡る月影に同化さるゝが如く、いはゆる羽化して登仙の感あらしむるもの、それが僕の理想に於ける戀です』

『しかし先生、行はれないに仕ても、清風明月に同化さるゝ如く、やはり戀は單獨に生ずるものでは御坐いますまい、何か一方に其、戀を生ずる原因とか反照とか、つまり、神聖の對等物が御坐いませう、男ならば女のうちに』

『さ、それが迚も無いから、僕の戀は生涯、得られない、たゞ無形の理想にとゞめて置くンです』

『あら、先生、さうなンですか、始めて分りましたよ、つまり先生の理想に叶ッた實物がないから、神聖の戀は理想に止めたまゝ得られないものと諦めて居らッしやるが、少し下ッて社會の組織上、必要に應じて神聖外の戀は無妻主義でない以上、その時の都合次第で、それは格別だと仰しやるンですね、ホ、、、、、妾また天女ででも無くッては御意に入らないかと思ひましてよ、ホ、、、、』

星影先生、あまり夢中に神聖を振廻して、戀を人間外に持上げ過ぎし今更ら、聊か狼狽の體、

『や、また改めて其うち、お話し仕ませう、どうも今日は頭腦の工合が、思ふやうに說が吐かれなくッて、前後、矛盾した事があるかも知れませンよ』

『いえ先生、大變よく分りまして、是非この上は近日、理想外の戀に就いて、つまり神聖以下の思召を伺ひたう御坐いますよ、御迷惑でも』

人間外の事は兎も角、浮世の事には先生よりも一枚上手の瀨田とよ子、ぐッと急所に釘を打込ンで歸りぬ、

八方八當りに夜な〳〵人のため八卦を立つれど、年が年中を凹垂れて、いッかう我身の有卦に入らぬ朝鮮髯の幸運寶、名に反いた不運も貧乏も今年こそに四十七、この年輩まで打續いては迚も浮ばぬものと自から諦らめて、無念殘念よりも觀念のよい男、三度の飯よりは一盃の酒が飲みたいばかり、されど飯さへ滿足に喰へぬ境涯、なか〳〵酒には近づき難く、一月あまりも遠退きし此ごろは、さらぬも浮世の鉋に削り落されて元來の細い奴、いよ〳〵細く痩こけて肥料の足らざる體、あはれや日蔭の胡瓜に似たり、

この日蔭胡瓜の向側は、ふしぎに痩せもせず、ぶらりと小肥りの絲瓜野郎、例の鑛糞熱に浮かさるゝ西川要五郎とて、さらに要領を得た事のない男、たゞ九州の空を望ンで十萬圓の二十萬圓のと饒舌るだけの藝を持ちし奴なり、

うらの畑に茄子と南瓜の喧嘩が御坐るといふ唄はあれど、これは表口より胡瓜が絲瓜の宿へ這込ンで、同じ貧乏蔓の緣に離れぬ互の交際、何の隔意もなし、

『西川さン、どうですな』

『やァ八卦屋さン、どうも斯うもない、御覽の通りだ、至極安泰で、太平無事に罷り在るよ、

隣屋の石作と違ッて、まめに毎日、ちよこ〳〵と出られない性分だからね、いよ〳〵こよといふ大的の覘ひが付くまでは』

『なるほど、水深ければ容易に波紋を示さずといふンですかね、しかし石作さンは實に感心だ、照ッても降ッても驚かず根氣よく出かけて、たとひ千三の方は出來なくッても、彼是する間で日に一度は必定、どッかで飯を喰ッて來るから、やはり營業になりますよ』

『ハヽヽヽさういへば、兎も角そンなもンだが、空足ばかり踏ンで無駄骨の折れる營業さ、時に八卦屋さン、君の隣屋も空屋になッて結構だ、全體、どこへ落伸びたンでせう、がらがらと騒々しい奴等でしたよ、どうせ無目的だらうが、方角ぐらゐ卦に出ませンかな

『や、彼奴等ア西川さン、どこといふ方角の定ッた人間ぢやアありませンよ、箸にも棒にも

揺らない奴だから無論、卦には上りませンさ、實に弱りましたね、あの三疋には、づうづうしくッて、いけ太くッて、性質の悪い上に嫌な屁理窟があッて、すれッからしで、血氣の奴等だから、壁一重の隣屋が堪らない、幸ひ身に傷こそ負はなかッたが、酷い目に逢ひましたぜ、この幸運齎の怨恨だけでも彼奴等、滿足に死ねる筈がない』

『ハヽヽヽその代りに今度ア、氣立の優しい容色の美い小金を持ッた若後家でも引ッ越して來て、間の壁を打抜くやうになるかも知れませンぜ、ハヽヽヽ』

『女といへば西川さン、さのみ今まで親しくなかッた例の亡者へ、この隣屋の廂髪が何だが妙に變な工合で、をり〳〵出這入するぢやアありませンか、をかしい樣子だ』

『をかしくッても、止る事は出來ないよ、先方の勝手だからね』

『なゲに、やくほどの男女でもないが、ちよいと氣にかゝるもンでね、第一お目觸りだ、ハ

ハヽヽ」

現世と未來の境目、いづれかといへば、現世の人間より未來へ近い亡者として、相手にせざりし外の奴さへ、をかしいぞ、どうも變だと目に付くほどの事、壁一重の隣屋に住ンで日本一の大先生と心得たる熊さン夫婦、いかでか見過すべき互に聲を潜めて私語き合ひぬ、

『ねエ良人さン、茫然して居ちやア濟まないよ、これが世間普通で、たゞの人なら雙方お互に出來合の御勝手さ、差支のない獨身が男女で金錢の入らないこッたから、高を括ッて面白半分に見物も仕て居れるが、あゝいふ邪氣のない風の變ッた先生に一方は良人さン、當節から油斷のならない廂髪だよ、それも先生が燒芋の蒸や麩麵屑の時なら、まだ少しやア女の方に肩も持てるが、あの時分は對ひ合ッて唾も引ッかけない女でさ、此ごろの芽を吹出した先生へ俄に近しく出這入するなア曲物だよ』

『なるほど、さう聞きやア捨てゝ置けねエな、二疋の内、どッちの方だ、何、丸顔の肥ッた方か、見るから蟲の好かねエ生意氣な女だな』

『眞實だよ、この長屋中で先生の味方ア良人さンばかりだから、外の奴に手を拍ッて笑はれない先、何とか仕てあげたいよ』

『しかし、いよ〳〵出來て仕舞ッたらしいかね』

『なアに、まだ出來た樣子がないからさ、出來て仕舞ッちやア良人さン、無效だよ、いふだけの甲斐がないよ、先生のためは今だよ、うるさく日に二三度づゝ押掛けるやうだが、まだ序幕を開けて五六日にしかならないからね、幸ひ今のうちだよ』

『ぢやア、頻と牝が仕掛けてる最中だな、この熊さンに恐れ氣もねエで、ふざけた阿魔ッち

よだ、畜生、ぶッ挫いてやらうか』

『お止よ、そンな手荒な事をしては不可よ、女の方より先生の方さ、先生さへ仕てやられ無きやア大丈夫だよ』

『だがね、先生が尋常の先生でねエから乃公が面と向ッて、こンな事に諍ましく騒げねエよ、外の事ア兎も角、色戀の沙汰ア別だからな』

『だッて、相手が悪いよ』

『よくッても悪くッても先生また、心で何と思ッてるか知れねエからな、思案の外といふからさ』

『思案の外になッちやア大變だよ、ならないうちに良人さン、眞實の親切が通るンだからね、若また年でも若きやア、岡燒のやうになるが、ことし四十二の厄年で、かういふ立派な女房のある身體ぢやアないかね』

『四十二の厄年ア宜いが、ハヽヽヽかういふ立派な女房は恐れ入ッたね、口を開いて他人樣に御披露の出來ねエ挨拶だ、いくら蟲が好かなくッても汝に比べて見りやア、あの廂髪の方が優だぜ、ハヽヽヽねエ嚊ア御本人に相談だ』

『おや、この阿爺、どうか仕たよ』

『ハヽヽヽしかし年が違ッてるから無理もねエ、汝も若い時ア隨分、ちよいと乙だッたよハハヽヽ』

『上氣きらないうち、早く良人さン、先生の方へ出掛けなさいよ』

星影先生、鼻頭の眼鏡越に破天井を仰ぎながら、僕の理想に於ける戀の實物は今日の人間界

になしと澄し込ンで、天下の女流一切を見ること糞壺の蛆蟲に等しきかと思へば、現在の事實例の瀬田とよ子が以來こゝに蒼蠅く訪來るを許して、さのみ蒼蠅くも感ぜぬ體、さては先生戀の目的物は女にあらずして、女は理想外でも神聖以下でも御意に觸らず御辛抱の出來る人格、寧ろ女の奈何に關せず女でさへあれば差支なしとの雅量もあるに似たり、

『先生』

そッと四邊を憚かるが如く潛めし聲に力を入れて、加之も情を含み一種異樣の調を帶びし先生の一語まづ耳に入れば、寂寞無聲の木像に等しき大詩人、わざ〳〵筆を擱き俄に机の肱を放ちて、祕せど自然に歡迎の微笑を浮べながら振返りぬ、

『前夜の雨で塵埃もなく、雨後の快晴は氣持の宜いもンですな』

『眞實ね、頭腦の中が洗はれたやうです事よ、かういふ日は先生お筆が進みませう』

『いや、賣文の徒と違ッて、筆ばかり進ンでも面白くないが、まア兎も角、詩味を損ぜないやうだ、時に瀬田さン、昨日の決心どうなりましたな』

『實は先生それで伺ひましたの、どう仕ませう、いつまで、かうして居ても困りますからやはり父兄の說に從がッて、田舍へ歸らうかとも思ひますが、しかし先生、遺憾ですよ、今さら故鄕へ歸ッて教員なンかするくらゐなら、この長屋で半歲も苦痛を忍びませンもの、こゝへ來る前に相當の風俗で歸りますもの、妾、どうしても嫌なの、こゝ三月の後には、妾に事實の同情を寄せてくれる方で、外交官の夫人になッてる舊友が是非、歸朝するンですからね、それまでは先生、眼前の小さい事に追はれて前途の大きい事を逸したくないンですよ』

自己の利害得失にさへ漠として人間放れの星影先生、まして他の俗事に眉を顰めて關すべき

苦なけれど。平生の先生は暫く中止の體、さらに腕を組ンで考へ出しぬ、

『むゝ一理ありますな、折角こゝまで堪忍して來て、その知己を待受けながら、わづか三月の今さら、田舍へ、なるほど、こりやア貴孃のために不得策だ、何とか仕て、此まゝ初志を繼續する工夫はないンですか』

『實に恥づべき事ですが、もう此上に、仕やうが御坐いませンの、妾、一人なら先生まだ多少、しかし妾のために、こゝへ來る時、やはり妾と同じやうに父兄から呼戻された友達を、引止めて今日まで同棲に居るンですもの』

『こゝゝ三月さへ凌げば、宜いンですな』

『三月の後には瀬田とよ子、こンな見苦しい風俗で、お目にかゝらない決心ですの先生』

『よろしい、僕が一考しよう、幸ひ或書肆の主人が、頻に僕へ好意を、むしろ自己の利益上より過度の希望を抱いてる時だから、何とか工夫が出來るだらう、よろしい』

『あら、先生、妾、それでは妾、先生、いけませンの』

『なアに同じことッた、出來得る事に自他の別ない僕ですよ』

『だッて先生、妾、感謝の道に困りますもの女ですから』

『先生、此ごろア大層、御精が出ますッてね、さう一途に御勉強なすッちやア、却ッて身に觸りやア仕ませンかね、わッしやア稼ぎに出て居ませンが、うちの嚊アめ、酷く氣に仕て居ましたッけ、ちと湯にでも這入ッて按摩でも呼ンで、お揉ましなせエな、飛ンでも跳ねても音の仕ねエ野郎と違ッて、大事の御身體だ』

『ハヽヽヽ言々句々、實に愛すべき人だな、好意は謝するが、さう身に觸るほど勉強も仕な

いよ』

『しかし先生、人といふものァ、何か一物、誰でも道樂のあるもンでせう、道樂と言ッちやァ變だが、全體、先生の樂みァ何ですい』

『さう聞かれると、聊か困るが、まづ適意これ娯樂だね』

『何ですッて、わかりませンよ、そンな持ッて廻ッた面倒な言葉ァ』

『ハ、、、持ッて廻ると却ッて面倒だ、適意とは自己の心に適した事だよ』

『へェ、どうしても先生は一風、變ッてますな、凡そ世の中に味方より敵が娯樂たァ』

『や、また間違が始まッた、敵ぢやァない、適だよ、適すると言ッてね、自己の意に叶ッた事、我心に合ッて氣に入ッた事をいふのさ』

『でせう、さうなくッちやァならねェ筈だ、をり〳〵先生、紛らはしい妙な言葉が出るから、此方で面くらッて、とンちンかンな事になるンですよ、ところで先生そこだ、何が一番、心に叶ッて氣に入ッてますね、早い談話が先生、この長屋中の人間にしてさ』

『僕の適意は、元來さういふ形のあるもンでないが、もし長屋中で心に叶ッた氣に入ッた人といへば、無論いふまでもなく君だよ』

『ありがてェ、そこで二番手は誰です、何奴ですい』

『ハ、、、露骨にいへば、いづれも皆これ眼中になしだ、殆ど有無に關せない、あッても無くても同じ事だよ、取るに足らないね、ハ、、、』

『その、あッても無くッても同じ中に、少しやァ先生、あッても差支のねェ人間があるでせう』

『皆無、ないね』

『先生、そいつァ怨枕だ、何故この熊に先生、お祕しなさるンですい、近來あの廂髪の肥ッた方が、ちよこ〳〵身輕に出這入するといふぢやァありませンか、出這入しても宜うがすがね先生、長屋の奴等ァ針を棒に口が蒼蠅から、あまり目立たないやう願ひますぜ、日に付いて自慢の出來る相手なら兎も角、あれぢやァ先生の估券が下りますよ、なるほど女は女に相違ねェでせうが、も少し何とか女らしくッて、面の裏表も先生、はッきりと判ッた女をね、あょいふ鑄型ァ先生、此頃紡績會社の中へでも行きやァ、ごろ〳〵腐ッて有餘るほど轉がッて居まさァね、價にすりやァ綿ッ屑よりも安いンですよ、ハ、、、、、』

熊さン思はず勢に乘ッて饒舌立てしが、その聲を聞いてか本人の瀨田とよ子、ぬッと入來る體に驚いて俄の大聲、

『おい鼻ァ、來てくれ大變だい』

壁一重を隔てょ耳を欹てし女房お菊、鼻ァ來てくれ大變だと叫ぶ聲に、思はず走込めば、眼鏡越に腕を組ンで鄭か不平の顏色を現はせし星影先生、無言のまょ廂髪を立てょ口惜し氣の脣端を嚙占めながら悲憤の面を赤めし瀨田とよ子、中間に熊さン進退これ谷りて啞の如く、今更ら最初の勇氣もなく、俄かに凹垂れし體を見るや否、いよ〳〵堪らぬ女房こょ一期の働きなり、

『ほンとに仕樣がないねェ、良人は、宜い年をからげてさ、これで今年は四十二の分別盛なンですよ、小兒ぢやァあるまいし、前後の思慮もなく調子に乘ッて、べら〳〵と、これが良人さン、平生お心易い間だから宜いやうなもンの、もし氣の小さい意地曲の惡い、妙に角張ッた七面倒な餘所の人樣なら全體、どうするンですよ、それでも良人さン、無事で濟むと思ッてるの、相手次第で大變な騷動になるンですよ、絲目の切れた奴凧とは良人さン

のこッた、ふわ〳〵的もない風に乘ッてさ、そのくせ落ちやァ此通りで、南瓜畑へ引ッ搦ンだやうな始末、急に手の著けやうが無いぢやァありませンか、あとは妾が何とか御挨拶するからね、早く歸ッて掃除でも仕なさい、困ッた良人だよ』

嚊アに叱り飛されて熊さン唯々諾々、ぐうの音もなく這出せば、女房いよ〳〵一騎踏止まッて後殿の武者振、

『先生、まァ濟みませン事で、いへ御承知の先生あゝいふ良人ですからね、何、氣にも腹にも、どう斯うといふ思慮があッて毒を吐くほどの性根ある男では御坐いませンの、たゞ貴君、夢中になると事の見境も分らなくなッて、ホ、、、實は先生、勝手な事を申すやうですが、やはり先生を思ひ過ぎて、つい、うか〳〵辷り出すンで御坐いますよ』

『なアに平生から、性質を知ッてるから僕は、意にも止めないが、あまり瀨田さンに對して氣の毒だッたよ』

『眞實、申譯のないこッて御坐いますよねェ貴孃、何卒、お腹も立ちませうが何分、今いふ通り圖に乘ると調子が狂ッて、始末に終ない前途闇黑の良人ですから、ホ、、、お爲を思へば、思ふやうに、優しく、そッと事の分るやうに申せば宜いンですが、つまり實はね、貴孃が近ごろ先生の方へ、急に近しくなさるのを長屋中で、何だか妙に變な勘違ひを仕て、いろンな影口を聞く樣子ですからね、雙方の御爲にならないと考へたンでせうが、たゞ考へたゞけで、その考へた親切も何も貴孃、めちや〳〵になッて仕舞ッてさ、あれですよ、ホ、、、鬼でも摑みさうに喚きながら、貴孃の顏を見るとすぐ堪らなくなッて、嚊アが來てくれ大變だと呼ぶやうな良人ですもの、ホ、、、まるで貴孃、お話になりませンよ、

『いへ妾だッて、先生さへ、しかし、あンまりでした事よ、妾、うまれて始めてなの、あれ

ほど遺憾なく侮辱を受けましたのは』

『おや、先生さへ御立腹なけりやア貴孃も、まア捌けて居らッしやる事、どうしても當節からの方ア、萬事お早いから、結構で御坐いますよ、それに長屋の人達が貴孃、知りも仕ないで、馬鹿々々しい事を申すンですよ、貴孃が先生に何だとか斯うだとか、人の疝氣を頭痛に病ンでね、ホ、、、ですから貴孃、御用心なさらないと、飛ンだ御迷惑になりますよ、根が揃ッて沒理家ばかりですから、ホ、、、』

嚊アに叱り飛されて遁出せし熊公、自己が塒へ駆込むかと思へば、其まゝ過ぎて八卦屋の幸運齋へ飛込みぬ、

『やア熊さン、どうしたンだ』

『しッ、靜かに仕ろい、嚊アに今、あとを任して遁出したンだ』

『何か間違でもあッてかね』

『なアに實ア、此ごろ向側の廂髪がね、ろくでもねエ洒ッ面ア廣げて、いやに頻りと先生の方へ這込むから、嚙ンで吐出すやうにコキ卸してやッたンだ』

『そいつア近ごろの出來だ、大體あの廂髪、何だか妙に蟲が好かない女さ、ひよこ〳〵動くたンびに、どうも他事とは見て居れないからね、第一あゝいふ女が居ッぢア、この長屋の不吉だよ、何とかして退散させたいもンだ』

『實際だ、ところで此方は夢中に饒舌ッてるから、知らねエよ、あれを考へても性質の善くねエ女だ、いつの間にか來やアがッてね、ぬッと背後に立ッてたのを、ハ、、、なアに一方が平生から乃公の感心してる先生の面前で無きやア、横ッ面の一擊も喰はして飛出すン

だが、偖さうも八卦屋さン、いかねエ場合だからね、ハ、、、仕方なしに嚊アを呼ンで、あと始末を任して來たが、今が地平均の眞ッ最中だ』

『ハ、、、惜しい事したね熊さン、どうせ後で地平均をするなら、鼻ッ柱でも蹴上げて遣りやア宜かッたに』

『何、また其うちに時機があらアね、此まゝぢやア濟まさねエ覺悟だ』

『どうだね熊さン、また時機は時機で、今これから引ッ返して出直しちやア、仲裁するやうな顔で飛込ンで、脚を掬う位の藝は手傳ッても宜いぜ、實は手傳ひたいよ、ハ、、、』

折しも山の神、はや既に一件を平らげて、歸れば良人の姿は見えず壁越の聲、さてはと忽ち八卦屋へ吐鳴込みぬ、

『良人さン、どうしたもンだね、自分の家は一軒手前だよ、こゝは三軒目の他人樣だよ、さういふ暢氣だから、あンな失策をやるンだよ、馬鹿々々しい、誰が廂髪に謝るやうな事を仕てくれと頼みましたのさ、そッと先生に氣を付けてあげろと言ッたンぢやアないかね、第一また當家の他人樣、この八卦よい屋め、引ッ返して出直せの、いや手傳ッてやるのと、よくも御親切に妾の亭主を唆かして下さるこッた、さうでなくッても世話のかゝる良人なンだからね』

『いや細君、さういふ理由ぢやア、決して、そンな考案は』

『ないで濟むと思ッてるの、しかし現在その口で今、言ッた事は確實だらう、妾の亭主は貸せないから、汝さン單獨で往ッて脚を掬うなり顏を引ッ搔くなり、他の手傳せずとも自分で本藝を遣ッてくるが宜い、朝鮮髢と廂髪の取組は觀物だよ、さア良人さン、早く自家へ歸ッて下さい、これから妾また當家の後始末をするからね』

この一月ばかりは幸ひに米の飯を食へど、それまでは燒芋の薩と麪麭屑を買ひに出る外、冬籠りの蟹に等しく、穴の奥に手足を縮めて泡を吹きながら、容易に浮世へ這出ぬ星影先生も、いつしか例の瀨田とよ子に動かされて、宙宇に迷ひし人魂の如く、夕暮の宵闇に音もなく、ふわ〳〵として八軒長屋を立出でぬ、流石に何とやら熊公夫婦の手前、かつは長屋中の目を忍ンで、そッと立出でし風俗は、數年來の日に曝されしよりも鼠に弄ばれしスコッチの鳥打帽を眉深に戴いて、はや十月の下旬、目にも見ゆる秋風の木葉散來る空を綿チルの單衣一枚、ふしぎに屑屋の鐵砲笊へも捻込まれざりし縮緬絹紬の兵兒帶、いはゆる上汐の吹寄せ下駄に脚下の力なく、怒然として俄に動き出し、飄然として輕く歩み出し、颯然として進み、颼然として左右を顧みつゝ、颼々然として吾妻橋を渡りぬ、

この星影先生、故郷の空にありといふ田地一反の外、天下そも〳〵いづこに鏑一文を求むべき、さるを何の苦もなく首肯いて、よろしい僕が引受けたと瀨田とよ子のために同情を寄せし三月の義俠物、たゞ目的は文雅堂にあり、

耳目に觸るゝもの皆これ卑むべき俗界の物質的といへど、ひよこ〳〵歩くよりは電車の輕便に如かず、詩人また時に其輕便を空しく看過すること能はねば、淺草の雷門前より乘込むや否、ことし二十九の男が貴君お危う御坐いますと手を取りて、老人か小兒の如く車掌に特別の注意を與へられながら、やう〳〵痩せたる腕を伸しつゝ帶皮に吊下りし體を、三十前後の女が見るに見兼ねて、こゝへ御掛けなさいと座を立ちし親切、いよ〳〵病人待遇なり、

神田小川町の角を引廻せし文雅堂、はや其日の業務一切を閉切りて、店員いづれも電燈の下に寄集りながら、餘念なき雜談の店頭へ不意に現はれし星影先生、

『おい、主人は居るかね』
新參の小僧、それへ飛出しぬ、
『どなた樣で』
先生、大に不平の顏色、
『主人は居るかといふンだ』
小僧ます〳〵眉を顰めぬ、
『主人は居りますが、どなた樣で』
先生、ぐッと癇に觸りし聲、
『わからない奴だな、汝では不可、誰か外の店員を』
じろりと見渡す中に幸ひ例の文士催促係、や、君と叫べば、はッと驚いて其まゝ奥へ遁込み

ぬ、
『旦那、大變です』
『どうした、何だい』
『來ましたぜ、本所の化物が、のこ〳〵遣ッて來ましたぜ、星影先生ですよ』
『馬鹿、何故うまく追歸さないンだ、今夕飯を喰ッたばかりぢやアないか、まだ胸にあッて消化も仕ないに、うか〳〵逢へるかい、思慮のない奴だ、あゝいふ先生方にはな、よほど身體の調子が宜い時に逢はないと、衞生上に頗る恐ろしい害のあるもンだよ、たゞ嘔吐を催すのみで濟むかい』
『だッて小僧が、居らッしやると言ッて仕舞ッたンですから』
『ぢやァ仕方がない、暫時、汝、店頭で何とか防いで居ろ、其うちには喰ッた物が自然と落

暑くから、しかし怒らしちやア面倒で蒼蠅いぞ、なるべく丁寧に茶でも出してね』

そも〳〵文雅堂の文士催促係として、いかなる怪物にも驚かぬ筈ながら、この星影先生のみには後も見返らず遁出したる男、まして今、不意に押寄せられたる狼狽の極、その顔を見るや否、無言のまゝに飛込みしが、うか〳〵食後に逢へる先生が夕飯が胃の腑に落著くまで防いで居れとの主命に、已むを得ず度胸を据ゑて店頭へ舞戻りぬ、

『や、これは先生、よく入らッしやいまして、只今また小僧めが、ハ、ゝ、ゝ先生の御顔を存じないもンですから、とンだ失禮を』

星影先生、始めて不平の解けし顔色、されど店頭に腰もかけず、立ッたるまゝなり、

『主人は居るンだらうな』

『はい、居りますが實は今朝より少々不快で、しかし外ならン先生が、わざ〳〵お越し下さいましたこッてすから、是非お逢ひ申すと、まづ先生、どうか暫時これで、おい小僧お茶を持ッて來ンか、お座蒲團も』

やう〳〵腰うち掛けし先生、わざと言葉を轉じて今更ら往來を見遣りぬ、

『この邊は賑はしいね、いろンな人間が通るよ、だが皆これ蠢々として無意識の動物ばかりだ、何のために首を前へ突出して間斷なく兩脚を運ぶか、さらに作用の要點が知れないよ』

『なるほど、先生のやうな高尚な方から見ると、ぞろ〳〵動いて歩く、この往來の人間が哀れに呵しいもンで御坐いませうな』

『蛆蟲も動くからね』

『へえ、いかさま、蛆蟲も動きますな、うよ〳〵と』

『時に近來、少しは讀むに足る書物が出來るかい』

『いへ、營業上、致方は御坐いませンが、迚も先生の前で、御覽に入れるやうな著述は出來ませンよ、貝もう俗うけ一方の駄作ばかりで、おい〳〵誰だ目錄を出しかけるなア、失禮な奴だ、餘計な事するない馬鹿ッ』

『困ッたもンだな、何故、さう恥を知らざる賣文の徒ばかり多いンだらう、實に慨歎の至極だ、しかし其うちには僕の作物が出るからね』

『有難う御坐います、つまり文雅堂の名譽になりますこッて、時に先生、今日、わざ〳〵何の御用で』

『兎も角、主人に逢ッた上、少々、談話の仕たい事があッてさ』

『どういふ御用か存じませンが、お話しの工合に依りましては、私が一應、伺ひました上でなァに先生、殊更ら主人でなくとも、却ッて御都合よく取計らへる儀も御坐いますからな、内々承はり置きまして』

『さうだな、汝に話しても宜いと、實は文雅堂のためになる理由で、例の著作物ね、百四五十ページといふ約束だらう、ところを僕が更に奮勵一番、尠くとも二百ページ以上にするからね、それに付ての相談だ』

『二百ページ以上、尠くとも二百ページ以上で御坐いますか、ヘェ、すると先生それの御脱稿は、先日、伺ひました節の御言葉に依ッて六年以上になりますな』

『まづ八九年は、かゝるだらうよ』

兎も角も店頭にて唐突の鋭鋒を防がせつゝ、その間に食後の腹加減を確と整へて文雅堂の主人、やう〳〵應接の一室に星影先生を迎へ入れぬ。

『こりやア先生、どうなすッたので、お珍らしいぢや御坐いませンか、わざ〳〵貴君が今ごろ、かういふ雑踏の俗地へ入らッしやるとは』

『ハヽヽヽいや俗は寧ろ僕の居るところの方が俗だがね、偖その俗が天眞爛漫の調を帶びてこの邊の虛榮を追廻る風塵中の俗とは俗の質が違ッてるから、どうか斯うか住ンで居れるのさ、ハヽヽヽ』

『なるほど、さういふ點も御坐いませうな、流石に先生の御住居だ、どうしても見るところが違ッてますよ、ハヽヽ時に先生、店の者が只今、ちよいと伺ひました工合では、例の御著作が百五十ページ以上になるさうで御坐いますな』

『さうだよ、實は僕もね、最初の間は持重の自衛策上、何だか今こゝで世に出すのが面白くないのみでなく、惜しいやうな氣も仕たがね、よく考へて見ると五十歩百歩だ、ついては更に勇を鼓して、大に筆を執ッて、つまり他日は他日、まづ今日は今日の僕として遺憾なきだけの大作を出さうといふ決心になッたよ、從うてページ數も增すからね、一は文雅堂の好意に酬ゆるため、一は讀者の渴望を滿たしてやるため、また自己が興に乘じた結果だ』

ハヽア、さういふ理由ですか、なるほど、分りました、しかし先生、讀者の渴望を滿たしてやるのは兎も角、わざ〳〵文雅堂のために約束以上お酬い下さらなくッても結構で御坐いますよ、先日また店員が出ました節、御脫稿は六年といふ事も承知いたして居りますから、なアに實は六年でも十年でも先生の思召次第、つまり先生だけは他の著者と違ッて特別の御待遇を申上げて居るンですから、何卒お心まかせに、ゆる〳〵とね』

『や、さう出られると猶更僕の方で、ます〳〵その好意に報いざるを得ない理由だ、是非、あ

らためて二百ページ以上にするからね』

『ぢやア宜しう御坐います、折角の御奮發ですから、三百ページでも五百ページでも先生の出來るだけを順ひませう、また時日の點も先生の御脱稿になるまで長ければ長いだけ前途を樂しんで、待ツて居りませう』

『ハ、、、人間は感情的だ、そこまでの雅量を以て僕に對せば僕また文雅堂に對して、長く待たして置くに忍びないからね、騎虎の勢ひで、猛然として筆を執らう、一瀉千里、まづ一年に一册づゝを與へよう』

『先生、そりやア酷い、手前は先生の生涯に一册の覺悟ですよ、苟くも書肆として先生の名編一部を賜はらば、文雅堂それで名譽の極點ですよ、固より先生の御著作なンかア賤しい算盤珠の外で、實は本屋の罪亡ぼしに出版するンですからね』

こゝまで無遠慮の敬遠策を施されても、蟹の目の上ばかりに飛出して猿の手の自己が尻に及ばぬ星影先生、いよ〳〵滿面に微笑を浮べながら得意の體なり、

『殆ど人爲でない、正に文雅堂が向上發展すべき自然の時節到來だ、その名譽の極點を幾度も與へるよ』

いかにも人爲的の業でなく、これは文雅堂の天災なり、

文雅堂の主人が巧みに施せし敬遠策も、人間の凡慮を以て當るべからざる大詩人には何の效もなく、ます〳〵星影先生の熱度を高めて、例の調子を鼻頭に振廻されたる結果、苦しまぎれに百五十ページ以上の約束すれば、この詩人また自己の都合上には案外の俗氣紛々、兎も角それに對して十圓ばかり出せとの事、十圓には替られぬ時の災難と諦らめて、その十圓を

差出せば、先生いよ〳〵得意滿面の體、なるべく、奮勵して筆を執るよと言殘しながら、飄然として立去りぬ、

店員いづれも呆れて驚いて無言のまゝ寧ろ感歎の舌を卷きし中に、例の文士催促係のみ、頻りに不平を鳴し始めぬ、

『困りますね旦那、あゝいふ事をなすッちやァ、相手が恥辱も何も知らない彼ですもの、うるさく癖になッて、この後が堪りませンよ、きッと旦那、これに味を占めて絶えずのこ〳〵遣ッて來ますぜ、いへ何、十圓の金は宜う御坐いますが、第一、もし聞えると外の先生方に對して濟みませンよ、いくら版を重ねても最初の原稿料以外、平に御免を蒙ッてるンですからな』

『わかッてるさ、いはれなくッても充分わかッてるがね、乃公だッて身體が大事だよ、あゝいふ先生に眞正面から一時間も熱を吹かれて見ろ、それこそ十圓の藥價ぢやァ濟まないぜ』

『何故また好奇心に旦那、氣の毒な感情をして謝ッてる先生方もある中で、わざ〳〵あンな厄病神を探し出して來なすッたンですよ、とッ付かれた上は今更、仕方ありませンが』

『さァ、そこだよ、店の小僧が業平町で逢ッたといふ風體を聞いた其日が汝、實は乃公の仁父の命日に當ッたからね、こりやァ捨てゝ置けない何かの因緣だと思ッて、わざ〳〵探し出したのさ、たゞ二十五圓、くれてやれば宜かッたのを、あれでも汝、以前、をり〳〵自版の雜誌へ投書した事のある人間だからね、つい原稿料と辷ッたのが災難のかゝり始めで、ハヽハヽとンだ因緣に搦み付かれたよ、しかし今日ぎりだ、斷乎として今後に取合ないからね、無論、今までの金は店の方からでなく乃公の小遣から出すよ』

『さういふ御孝行から出たと仰しやれば何も旦那、泰公人の私どもへ御遠慮には及びませン

よ、店の方から御出金になッても宜う御坐いますが、あの勢ひでは旦那、此方は出版の有無に關せず生涯に一册だけ佛へ對して買ッてやる心算でも、相手は委細かまはず年々に一册づゝ持込ンで來ますぜ、加之も讀者の渴望を滿たしてやるの、文雅堂の好意に酬ッてやるのと、叶す事が癪に觸ッて堪りませンよ、大體が精神に異狀のある半狂亂と思ッて居ても、さうは彼奴の御保護ばかり出來ませンからな、いッそ二三日のうち逆寄に押掛けて、今後無關係の宣告でも仕てやりませうか』

『や、待てよ、うか〳〵唐突に汝、そンな事を仕ちやァ大變だ、あの上に氣でも違ッて來ると猶更面倒だよ、其うち何かの機會を見て、うまく退治するからね』

『ぢやァ旦那、どンな事があッても今後お逢ひなすッちやァ、いけませンよ、店は一切、團結して、思ひきッて、手嚴しく當りますからね』

ペストかコレラに取付かれし如く恐れて、泣く〳〵文雅堂の主人が差出せし十圓を、この星影先生は我に對する感涙と心得て、物質的も時に取ッての便宜上、また神田の小川町より淺草の雷門まで電車に運ばれつゝ、飄然として吾妻橋を渡る頃は、夜の十時を過ぎて、こゝ三日あまりに圓ならンとする秋の月、いつしか斜めに向島の奥より銀盤を棒ぐるが如し、

星影先生、いよ〳〵詩的に入る心地、暫し我を忘れて橋の中央に立停りながら、月と水とに對うて何をか語るに似たる折しも、そッと背後より立寄る人影、

『先生、今お歸りですの』

振返れば例の瀨田とよ子、何やとら風情ありげに立ちぬ、

『や、瀨田さン、どうして今ごろ、運動ですか』

『あら先生、酷い事、妾、運動では無くッてよ

『どッかへ、用にでも出掛けたンですかね、もう十時でせう』

『實はね、お待ち申して居ましたの、先生の、お歸りを、こゝで』

『何、僕の歸るのを』

『きのふの御言葉で、明日の夜、神田の或書肆へと仰しやッたでせう、だから妾、こゝで、お待ち申して居ましたの、妾を知られない人のため、いくら侮辱されても、どンな障害を蒙ッても、それがため同情を失はないと信じて居る先生ですもの、妾、思はず感謝の念に駆られて來ましたのよ

『ハ、、、婦人の通有性ですな、しかし其短所ともいふべきところに寧ろ自然の美德があるンでせう、ハ、、、なアに鄰屋の車夫も別段、惡意あッて喚いた理由では無いですよ、ありやア元來あゝいふ露骨的の男でね、つまり自己以上に接した事のない境遇と無教育の罪さ、自分の妻に一喝されて忽ち遁出した點が彼の本色ですよ、ハ、、時に瀬田さン、兎も角も貴孃の一時を補ひ得らるゝだけの事は、かりに今夜、ちよいと、ある書肆から持ッて來ましたからね」

『おや、先生、どうしたら妾、宜いンでせう』

『もし、これが貴孃に對して送るものと知れば、その書肆は貴孃に對うて多大の謝辭を呈するでせう、その書肆に僕が金錢上の命令を與ふれば、與へられるだけ書肆としての名譽と利益を多く併せ得るの便宜が生ずるンですからね、また僕に取ッては更に何の痛苦も感じない、わづかに半ページの原稿を增せば優に餘ある結果だ、ハ、、、』

『だッて先生、その半ページで優に餘あるほどの先生をして、たとひ一字でも、妾のため、

書肆の利益物に、おさせ申すのが遺憾ですわ』

『まア、そンな事は、どうでも宜いと仕て、今夜の月は一入ですね』

『先生、もし月が妾等を、變に疑ッて、卑しく照してくれないものとすれば、妾、この月に乘じて淸く快よく、向島を散歩したう御坐いますよ』

『無論、月は無心の塵外物ですよ、出かけませうか』

人は定まり夜は更けて後、衣香扇影の春の夢と過去りし向島に、草葉の露の蟲の音を哀れに聽きながら、靜けき殘ンの枯葉越に秋の梢の月を仰いで、氣も心も隅田川の流に添ひつゝ、ぽッと薄墨の刷毛繪に似たる白髯の森を遠く望み、近く水に浮べる待乳の山を振返りて、外に影なき才子佳人が何とやら互の胸に思ありげの風情といへば、なさけの神にも妬まるべき人生一期の情致こゝに極まれど、實は鐘が淵の紡績會社より歸り來る工女にも羨まれぬ半狂氣の新體詩人と腐り果てし鰕茶の式部墮落、搦み合うての散歩は只これ十圓紙幣一枚の業なり、

『凡そ世の中に月ほど詩的を帶びたものはありませンよ、實に月は人間の生命に缺くべからざる露の結晶體だ、わけて秋の月は淸く高く冴えて、照すところ一點の俗臭も許さない、浮世の利害得失も窮達消長も無いですよねエ、瀨田さン、僕のやうな感情に深いものは自然に同化せらるゝの極、善惡の外に逸出するから、或は却ッて人生普通の軌道を踏外すかも知れない、ハ、、、、堪らないね、この月に對しては』

『あら、先生、貴君ばかりでない事よ、妾だッて、たゞ無心に肉體ばかり照されては居ませンの、何だか妙に一種の、口で言はれない一種の我を忘れたやうな何か起ッて來て、もう世の中の名譽も不名譽も利害も希望も無くなりますわねエ、先生、どうしたら妾、この月

に對して遺憾なく、妾の氣が濟むンでせう』

『こりやァ不意撃に困ッた問題だ、聊が答案に苦みますね、ハヽヽヽ』

『妾、もし妾が先生なら、少しも困りませンよ』

『困らない、ぢやァ假に僕と地位を替へて見て、どう困らないンです』

『困りませンの、困らないぢやありませンか』

『その困らないといふ、困らない理由を聞きたいもンだ』

『いやですよ先生、妾は先生の地位として困らなくッても、先生は妾の地位になッて、困る方だもの、困らずに居れない方ですもの、ホヽヽヽ』

『いよ〳〵分らない、貴孃が假に僕として困らない自信があるンでせう、すれば僕が自信のある貴孃になッて見て、猶更困らない筈ですがね』

『筈でも何でも先生は事實に於て確實に困る方、妾は困らない人、ホヽヽヽおや先生、牛の御前まで來ましたよ、土堤の上も、ですが、あの境内へ這入ッて見たい事ね、かういふ月夜の薄闇い木影は、また却ッて別種の趣味があるもンですよ、ねエ先生』

『や、面白い、その邊から土堤を降りませう、しかし瀬田さン、草に露を持ッて脚下が辷りさうだ、もし怪我でもすると不可よ』

『あら、先生、妾、怪我を仕ては貴君いけないの』

うす闇き樹下闇に潜める魔の手に差招かれて、男も女も平生の口とは正反對の動物、ずるずると其まゝ音もなく引摺込まれぬ、

神田の文雅堂にて十圓紙幣一枚を得たる星影先生は、幸ひ電車内の掏漢に取られねど、瀬田

とよ子のため吾妻橋の上に網を張られ其まゝ向島の月に誘ひ出されつゝ、果は牛の御前の境内、人なき樹下闇に吸はるゝ如く引摺込まれて、ことし二十九の今夜こゝに始めての大詩人もはや神聖の戀も理想の美もなく、議論も絲瓜もない骨ぬき鰌となりぬ。

業平町へ歸り來りしは其夜の十二時も過ぎし頃、月いよ〳〵空に冴えて、地に曳く影の流石に伴ひ難く、わざと三四間を前後に隔てながら、瀬田とよ子まづ長屋の入口に近づくや否、今ごろ何のためか内より不意の出合頭は南無三寶、相手も相手に依りけり例のお虎婆、

『誰だい、唐突に、おや、鄰屋の廂髪さんだね、おや〳〵今時分、なま若い身空で何處を彷徨いてたの、どこから歸ッて來なすッたの、餘計なお世話だが氣になるよ、老婆といふものはね』

『ホ、、、かういふ月ですからね、うか〳〵向島邊を散歩して、つい遲くなりましたの』

『一人でかね、ぢやァ無からう、何だか變に怪しいよ、もし月が良くッて出るなら病人でもない友達が淋しく家に殘ッてるぢやァないかね、お不在に物を取られる御身分とも思へずさ、同伴に連立ッて出さうなもンだ、ハ、、、』

『病人でなくッても、氣分が惡いからですよ、夜露は衛生に害があるもンですからね、わざと殘して置きましたの』

『はゝァ、さやうか、それは失禮千萬、とンだ見當違ひな事を申上げましたね、こゝで爭ッても仕方がない、まァ靜かに這入ッて寢なさい、明日の朝また聞きたい事があるからね』

『どういふ理由ですか、まるで妾、繼母の迫害を受けるやうですわ』

『繼母、まゝ母の事かね、ふざけなさンな、出來は二の町でも娘と名の付く娘を持てばね、そンな勝手な眞似をさして置かないよ、夙ッくの昔、女郎にでも叩き賣ッて金にするさ』

瀬田とよ子、むッとせしが、現在この身に後ろ闇き今夜、加之も夜更けて寢耳に近き棟割長屋の入口、まして四五間の彼方には事實の相手ありて、あとに心は殘れど爭ふ勢ひもなく、たゞ冷かなる笑聲に紛らしつゝ遁込めば、お虎婆、舌鼓もろとも振返りながら、また月に對うての獨言、この長屋を自己が手に握れる關守の如し、

『さア、これで長屋中に足らない奴は、あと一疋だ』

きくや否、長屋の裏角に板張付の如く息を忍ばせし星影先生、はッと驚いて方角も定めず遁出せしが、あはれや今夜、この一夜を露に打たれて、綿ネル單衣に肌寒き曉まで、うろ〳〵何處を彷徨ふやら、他人に知らねど、流石に詩人の戀は最初より趣味多し、

せめて二室か三室の家に四五人の住居ならば、さのみ目に立たねど、マッチ箱に似たる九尺一間づゝを壁と壁との棟割長屋、寢ても起きても人間の有無は手に取る如く、わけて平生は穴籠りの星影先生、まづ第一に怪しまれぬ、

加之も鄰屋の熊さン夫婦が眉を顰めて私語きし體を、早くも見て取りしは向側のお虎婆、自己が壁一重の鄰屋も案外の閑靜なる體に、そッと差覗けは松坂あさ子たゞ一人、此ごろ長屋の風聞に上る瀬田とよ子の姿なし。

まして宵の九時前後より十二時ごろまで、ともに打揃うて以上の男女が歸らぬ不思議さ、占めたと膝を打ちて抜け殘る亂杭の齒に笑を含みながら、長屋の入口に關を据ゑて待てば、果して案に違はず、こそ〳〵と遁入りし女の風情、あとの野郎一疋を二時過まで空しく待草臥れしが、いよ〳〵必定それと睨みぬ、

たとひ事實それでなくとも、此まゝでは濟まさぬ婆、夜の明くるや否、のこ〳〵鄰屋へ押掛

けぬ、

襲ひ込まれし瀬田とよ子、また打てば響いて斯る事に素早い女、さらぬも近來、ちら〳〵長屋中に目を付けらるゝ折柄、あの車夫と此お虎婆を前後の敵に受けては叶はじと、例の十圓より一割、その一圓を喰はすべき覺悟、

『あら、お早い事ね、妾、やう〳〵今、起きましてよ』

『そりやア、さうでせうとも、嘸お勞だからね、ハ、、、、』

『眞實、勞れましたの、あまり月が冴えて居て、うか〳〵前夜、あれまで夜露に打たれたンですもの、ホ、、、しかし今日は久しぶりで故郷から、少しですが爲替の著く日ですから、何か滋養物でも喫べて、身體を休めませう、ねエあさ子さん、遲くも今日の正午ごろには著くでせうね』

『おや、爲替、爲替といへば、お金が來るンですかね、今日の正午ごろに、おや〳〵まア結構なこッた、この長屋中で爲替の來るやうな人間は、迚も外にありませンよ、おうら山吹、全體、どれほど來るンですい』

『實はね、これから毎月、尠くとも十圓づゝ來るやうになりましたの、きッと十圓づゝは妾、取る覺悟ですの、取らなくッては、つまりませンもの、ホ、、、、失禮ですが、もし御入用なら、少々は御融通しても宜いンですよ』

『おや、おや、おや〳〵そりやア、豪氣だ、いへ何、かうしてね、同じ棟割長屋でも、壁一重に鄰り合ッてるのは格別また何かの深い因緣ですよ、ハ、、、、もし外の奴が彼是、いやに妙な事でも吐した時はね、この婆が引受けて、たゞ置くこッちやアない、安心なさいよ、どうも他の癇氣を頭痛に病ンで、餘計な口を出す奴が多くッてね、ハ、、、まアこの長屋

で、根が上品に出來て居て萬事、おとなしいのは當家の御二女と、あの向側の先生樣ばかりだ、へ、、、』

人間こゝに至れば一身兩樣の使ひ分、その作用の捕捉すべからざる轉化變妙、魔術師の奇藝よりも面白し、

お虎婆のため長屋の入口に俄の關を立てられ、さアこれで後の野郎一疋だと聞くや否、はッと驚いて其まゝ遁出せし星影先生、まして久しく燒芋の蒂と麭麵屑に飢餓を凌いで、やうやう近來こゝに米の飯を喰ひ始めし身體、方角も定めず秋の夜長の終夜ら露に打たれながら、うろ〳〵狼狽き廻りし曉方の哀れさ、頻りに水鼻の垂るゝは綿ネル一枚の肌寒に風を引込んで、さらぬも前夜の骨ぬき餡、今朝は一入いよ〳〵弱り果てゝ、茫然と歸り來りぬ、

されど先生、いざ長屋の入口となれば茫然ともせず、急に氣を取直して斥候の敵狀を窺ふ勢ひ、幸ひ左右の兩側に人の影なき機を見澄すや否、ちよろ〳〵と泥溝鼠の如く這込んで、そッと自己が巢に藻潛込みつゝ、じッと息を殺せしまゝ暫し身動きもせざる體、平生の無趣味なる詩的よりも頗る案外の滑稽を帶びたり、

流石に疚しく恥かしき鄰屋の熊さん、もはや稼ぎに出でし樣子何とやら恐ろしき向側のお虎婆、また不思議に閑靜なる樣子を見て、先生、まづ一時の安堵せし心地、やう〳〵落著けば、前夜の月に牛の御前の樹下闇、目に浮びて忘れ難く皮肉を通して骨に刻まれたるが如し、加之も目に浮びて心に忘れ難く皮肉を通して骨に刻まれし其本尊は、同じ長屋に廂と廂と相接して六尺の通路、人目さへなくば居ながら互ひに語り合ふべき間、前夜あの後いかにせしか、嘸や寢もやらで枕を欹てつゝ我足音を待明せし今朝、そッと歸り來りしを知るや知らず

やと、おもはず戸口より差覗けば、彼方も戸口より情に得堪へぬ半面を現はしながら、にこりと笑ひし笑顔は毒刃の一閃、されどこの詩人に取ッては自己たゞ一人に漏れ來る天國の光輝よりも清く尊く有難し、

折しも熊さンの女房、わざと顔も出さず、たゞ壁越の聲、

『おや、先生、お歸りですね、前夜は、どこで御一泊なすッたの、良人が大變に心配して居りましたよ』

『ハ、、、それは氣の毒だッた、しかし實はね、神田の書肆へ用があッて、ところが久しぶりだから、無理に引止められてさ、困ッたよ、好まない酒を強ひられて、殆ど終夜の苦痛だ、今朝まだ頭が割れるやうだ』

『あら、さうですの、さうとは知らずに先生、どンなに案じましたか、めッたに御出なさらない貴君が、ふいと急に、默ッて、何とも仰しやらないもンですからね、ホ、、、眞實、本屋さンへ御用だッたンですか』

『今日の僕として、外に寢るところがあるもンかね、ハ、、、』

『だが先生、何だか此ごろは妙に世間が物騷だといふこッてすからね、うか〳〵夜、お歩きなすッちやアいけませンよ、今までと違ッて猶更大切の御身體ですもの、もし御用があれば、お手紙を戴いて良人が貴君、どこへでも飛ンで行きますよ、ねエ先生、これからア、さうなさいよ、また御自身で無きやア叶はない時は幸ひ、良人が俥でね』

『や、有難う、いつもながら、實に感謝するよ』

感謝は同じ感謝なれど、さて今日よりの星影先生、その感謝の程度に於て今までとは聊か自然の相違ある筈なり、

『瀬田さン、ほンとに妾、貴嬢には驚きますね、恐れ入りましたよ、どうして、さう大膽に、機敏になれるンでせう、つまり天性ですね』

『あさ子さン酷い事、天性は酷い事よ、いくら妾だッて、これを天性に見られては、默ッて居れませンよ、事實、他に方法の盡きた苦痛の結果で、いはゞ境遇の迫害を免るゝ一時の便宜上で、餘儀なく、已むを得ないための犧牲になッたンですもの』

『あら、その事が天性と言ッたのでは無いに瀬田さン、只その事に付いての機敏に妾、驚いて感心したンですよ、ホ、、、相手が尋常の人でないから、猶更』

『たゞの人でないから猶更、與し易いンですよ、もし世間普通の常識を備へた人なら、迚も妾が、どうして、かう容易に成功、ホ、、、成功は妙ですね、何だか變ですね、ホ、、、つまり詩的とか理想とか、到底この人間界に出來得ない不可能を目的としてる人ですから、案外、人間界の實際には疎くッて幼稚ですの、ね、しかし、あれでも詩人の端くれに相違なくッてよ、現在、神田に原稿料を出す出版書肆があるンですもの』

『ふしぎですね、一部に付いて幾何ほどの原稿料でせう』

『まだ分りませンがね、現に前夜の十圓も、さのみ面倒なく出來たらしいですのよ、無論、妾に對する本人の言葉ですから、悉く信じられませンが、その十分一に聞いても、どうか斯うか筆さへ執れば、まさか衣食に窮するやうな事は、無いらしく思はれますよ、だから妾、今のうち執れるだけの筆を執らして見る心算ですの、ホ、、、』

『瀬田さン、あまり貴嬢のため正直に、一所懸命に筆を執り過ぎて、その執り工合が萬一、もし貴嬢の愛を或一方から奪うて轉化せしむる動機になッては大變ですよ、いくら貴嬢が

一時の方便に供する心算でも、策謀は竟に眞實を制し得ませンからね、また貴孃だッて世俗の所謂る、嘘から出た實といふ事に傾かないとは妾、今は兎も角、長くは保證しかねますよ、かりにも詩人といへば高尚な業で、第一あの人だッて、こゝといふ特殊の缺點を見出すほどの醜男では無いンですもの、瀬田さン、怒ッては嫌よ、妾だから、かう露骨に言ふンですの、ホヽヽいくら忘れなくッても獄裡の人は、ある期限まで奈何セン其まゝ獄裡の人で、獄裡以外の他に直接の新勢力ありとせば、瀬田さン貴孃に限らず感情の動物ですからね』

『口惜しい事、あさ子さンのために妾、そこまで薄志弱行に見られたンですか、これが天性だの、獄裡以外の新勢力に傾く恐あるのと』

『いヘ瀬田さン、だから言ッてるぢやありませンか、もし萬一、そンな事になれば大變だと』

『憚りさま、この瀬田とよ子は一時の已むを得ない便宜上、形ある肉體を傾けても、形のない精神的の愛は動きませンのよ、夜毎の萬人に接する卑しい娼妓でも、心の愛を注ぐのは生涯に只一人ですとさ、妾、あさ子さン、その醜業婦以下ですか』

どこで仕込まれしか蓄音器と一般、相應に鳴るだけの聲は鳴出す女なり、

世間は目に見えぬうち、はや風の音に驚いて、朝夕の肌心地に秋は知れど、この八軒長屋は一年中に夏と冬との二期あるのみ、春は其まゝ夏の部に引摺込み秋は冬の部に押込ンで、そろそろ筑波颪の水鼻を誘ひ來る頃に單衣より一足飛の破布子、十一月の聲に攻寄せらるゝや否、いざや事となりけり俄の大狼狽、頻りに質屋の庫を望ンで怨めし氣に騒ぎ始めぬ、わけて例の幸運齋、自己は他人の[illegible]命を手に取る如く饒舌立てながら、いづこも同じ順を追

うて年々相違なく定まりし月日の來るに氣が付かず、今更不意の闇討を喰ひし如く驚いて、さア大變だ、かうしては居られぬと狼狽出しつゝ、此ごろは淺草に殆ど徹夜の一所懸命、流石の淺草も冬の初期は人影いつしか早く散り失せて、はや十二時に近づけば仲店の敷石を下駄の音、からころと數ふるばかりの淋しさ、まして山門の傍なる濡佛の邊は、うろ〳〵迷ひ犬も這寄らぬ闇の中を、神易の弓張提灯に算木と筮竹を置並べて、ほしや〳〵の朝鮮髯こゝに悄然たる折しも、中折帽の鍔を深く悠々と懐手のまゝ歩み來る男あり、や、鴨一羽、占めたと幸運齋、おもはず威儀を正して俄かに饒舌出せし鼻頭へ、ぬッと立ちぬ、

『骨相、手筋、時の判斷、事の吉凶、一身の運勢、但しは他人に係る一切の利害得失、いづれで御坐いますな』

きくや否、くつ〳〵と笑ふ聲に、むッとして見上ぐれば、行方も知れず飛去りし例の吉川實なり、

『どうだい、八卦よい屋、相變らず不景氣な痩ッ面を傾けてるね、おひ〳〵冬空に向ッて來たぜ、一蓮托生いづれも大騒動だらう、お虎婆も廂髪も金糞も千三も亡者も車夫も無事かね、可哀さうに浮ばない奴等だ、ハヽヽヽ』

幸運齋、占易よりも眼前の風俗を見て取ッて眉を顰めながら、何が悲しいやら呵しいやら半泣の苦笑、

『吉川さん、ふしぎに羽織も著物も小ざッぱりと時候に叶ッてますな、白縮緬の兵兒帶を卷付けた工合、兎も角も委細は其方のこッた、まづ此方は先達の四十九錢、是非とも今こゝで御返濟を願ひませうか』

『ハヽヽヽいぢらしい音を吐くわい、しかし四十九錢とは正直だ、そら一圓、くれてやるぞ』
『えッ一圓、なるほど、こりやア一圓紙幣だ、全體まア吉川さン、どう仕たンです、大丈夫ですか、この一圓を此まゝ貰ッて置いても』
『危險と思やア、遠慮なしに返すが宜いぜ、わざ〳〵念を押して遣りたくもないからね』
『いや別段、怪しいとも何とも言ッて居ませンよ、たゞ四十九錢が不意の一圓になッて貴君の風俗が急に、その風俗ですからね、加之も取られた覺があるンですもの、ハヽヽヽ』
『けしからン事を吐すよ此奴、さういふ蛆蟲のやうな料簡で居るから、いつまで其ざまだ、無い時は鐚一文も無いが攫めば千金の男だぞ、うす汚い朝鮮髯でも剃ッて出直せ』
『や、事と次第に依ッては今、すぐでも髯を剃ッて伺ひますがね目下、いづれですな、御住居は』

『ハヽヽヽさう急に伺はれて堪るかい、第一これから御自宅へ歸るンぢやアないンだ、時刻と方角を考へて見ろ、淺草の後に別世界ありだ、情夫は退け過といふ事を知らないか、どりや、そろ〳〵出かけよう、嘸や嘸我せこが來べき宵なり、さゝがにの、ハヽヽヽ』
『吉川さン、ちよいと吉川さン、まだ談話がありますよ』
『馬鹿ア言へ、その一圓で澤山だ』

闇に打出せし鐵砲玉の如く、行方も知れず飛去りし吉川實、幸運齋の身に取ッては兼てより怨恨ある奴なれども、はや諦めし四十九錢が思はぬ不意の一圓となりし今夜、その一圓に忽ち罪も報いも忘れ果てゝ、八卦道具を小脇に抱へしまゝ繩暖簾へ飛込ンで空腹に久しぶりの酒、三四合の醉に陶然として歸り來りぬ、

はや夜の十二時を過ぎて一時に近く、ひッそりとせし長屋の入口より二軒目、火もない眞ッ黑闇に這込ンで、其まゝ丸寢の手枕に身を横へしが、ふしぎや今夜出逢ひし吉川實の空巢、壁一重鄰屋の空屋に猫か鼠か、ごそ〳〵といふ物音、

『しッ、畜生』

ばたりと止みしが、まだ暫時の後に、ごそ〳〵といふ物音、壁際に倚添ひつゝ耳を欹つれば猫とも思へず鼠とも思へず、何とやら人間らしき體に、はッと今更ら首を縮めて驚きぬ、

さては狽狽へし盜賊め、そも〳〵この八軒長屋を何と心得て迷ひ込みしか、怪我さへせずば此奴おもしろし、いざといはゞ第一番に熊公を呼起す覺悟、そッと自己が塒を脱出でゝ、恐音を忍ばせながら鄰屋の戸口を探れば、果して二三寸、入口の柱際より隙いたり

酔まぎれの朝鮮髯、中腰に這寄ッて、その二三寸、がたりと閉切るや否、兩手に戸を押へて俄の大聲、

『盜賊、盜賊ッ』

叫ぶ聲もろとも空屋の内より一所懸命、戸を押倒して飛出せしは確に二人、その一人は方角を失うて長屋の奥へ、その一人は首尾よく長屋の外へ遁出せし體、

押へし戸を抱いたるまゝ反仰に倒れし朝鮮髯、とか〳〵と其上を二人に踏まれて猶更の大聲、今にも絞殺さるゝが如し、

『助けてくれッ』

聲と物音に寢耳を貫かれし長屋中、いづれも飛起きて躍り出せしが、さて一點の火もない闇の中の大騒動、

『どこだ〳〵』

『遁すな』

『ぶち伸めせ』

『金庫に用心しろッ』

其うち手早くマッチを擦出せしは熊公の女房、豆ランプの光りに立寄れば、戸の下より這出でし朝鮮髯、

『二人だ、どろぼう二人だ、一人は奥へ遁込ンだぞ、入口々々、さア入口を塞いだ入口を』

や、占めたと長屋の入口を塞ぎしは熊さンと鑛糞野郎、やう〳〵起上りし朝鮮髯は豆ランプを片手に差上げて、千三の石作は心張棒を提げながら、跫音高く地團駄を踏ンで叫び出しぬ、

『さア盗賊、この長屋ア一方口だ、觀念しろ、うぬ唐突に出やアがると生命がないぞ、出るなら出ると言ッて出ろ』

お虎婆も廂髪も火を點して内より立騒げど、流石に詩人の星影先生のみは寂寞として火もなく音もなし、

『おい熊さンの細君、鄰屋の先生にも火を點けて貰はないと困るよ、何だか右側の奥が薄闇いから』

外に遁路のない一方口の奥、隈なく探せど盗賊の影なきのみか、火も音もない筈、ふしぎや先生の影もなし、

空屋の戸を押倒して内より飛出せしは確に二人、その一人は首尾よく外へ遁出せど、その一人は狼狽て奥へ遁込みしに、脱出る穴も寸隙もない一方口の行止りに影さへ見えぬのみか、加之も猶更不思議は長屋中で俄に一人の失せ物、

さりとて屋根傳ひに遁伸びし體もなく、わづか六尺の間三四人も立塞いで居ながら頭上を飛

越えられ股間を這脱けらるゝ筈もなければ、星影先生の事は偖置いて、あの朝鮮髯め、久しぶりの酒に夢現の寢恍騒動であるまいかと笑へば、「八卦よい屋、眼を丸くして怒り出しぬ」

『人を馬鹿にするッて、程度のあッたもンだ、あまり酷いよ、いくら空腹に久しぶりの酒を注込ンでも、いくら世間普通より早く耄碌しても、たしかに壁越の物音を聞澄した上わざわざ自己が塀を這出して鄰屋の戸を兩手に押へてさ、加之も其戸と同時に押倒されて、どかどかと蹂躙られるほど御丁寧に念の入ッた寢恍けやうがあるもンかね、正に二人だよ、まッ闇でも外と内とへ分れて遁げた跫音が畜生、まだ耳に殘ッてるばかりでない、戸を跳ねて起上らうとする途端、奥の方へ遁込ンだ奴に後足で現在、この頬ッ邊に蹴られたンだからね』

なるほど、きけば夢うつゝの寢恍騒動でもなし、されど縫目も破れぬ袋の底へ遁込ンだ奴の居らぬは不思議の至極、それに不思議は右側の奥の一軒目、この騒動中に消えて無くなりし星影先生、夜が明けても歸らず、正午を過ぎても歸らず、其まゝ夜に入りても竟に歸り來ぬとは是また長屋中の不思議の種となりぬ、

『どう仕たンでせうな、他のこッたが不思議ですね』

『さア、をかしいぜ。

『何だか近來ア、急に續けて米の飯を喰ひ始めた樣子だからね、弱りきッた蟀蟋へ瓜の實を遣ッたと同じ理で、俄かに身體へ生氣が付いて、當もなく籠を飛出したンぢやァなからうか』

『そこだよ、飛出したに仕ても、やはり根は蟀蟋と違ッて人間だからね、今日は歸りさうなもンだ』

『わるく考へて、もし空屋から飛出した二人の一人が、それでさ、慌てゝ外へ遁げたとすりやア不思議もないが、あとの一人が奥へ遁込ンだとすりやア不思議だね、また遁込ンだ奴が別物とすりやア、猶更不思議だ、この長屋の奥で人間二個が消えて無くなッた勘定だからね』

『いや、消えて無くなッたかも知らないぜ、平生から人間放れを仕て、ありやア亡者の部だよハヽヽヽ』

鑛糞の西川要五郎、千三の石作、朝鮮髯の幸運齋、いづれも事あれかしに、面白半分の奴等、頻りに打集りて、とり〴〵の噂に騒げど、熊さン夫婦、立寄りもせず眉を顰めて人しれぬ腕を組みぬ、

『嗅ア、いよ〳〵變だぜ』

『妾もね、實は良人さン、妙に思ひ當る事があるンだよ』

神田小川町の出版書肆、文雅堂の店員、おもはず聲を潜めながら、や、來たぜ〳〵といへば果して例の星影先生、今日は飄然とも得せず、ひよろ〳〵として今にも倒れンばかりに入來りぬ、

『主人は居るかね』

『お生憎さま、不在で御坐いますよ、居りませんよ』

『居らない、どこへ往ッた、いつごろ歸るね』

『何處とも聞きませンので、また何時ごろといふ事は、迚も』

『では、あの、文士連を廻り歩く男、あれは居るかね』

『それも居りませン、今日は當店に取ッて大切な先生方を三四軒、お伺ひ申すと言ッて出ましたから、到底、急には歸りますまい』

『困ッたな、主人も彼も居らンでは、外の者に分るまい』

『いや、分ッて居ります、先生の事に付いては懇々、よく申聞けられた事が御坐いますから、分ッて居りますよ』

『むゝそりやァ感心だ、文雅堂の主人なか〳〵面白いところがあるよ、過日、不意に來て汝達が知らなかッたから、後で懇々、僕の事に付いて何か言はれた事があるンだな、ハヽヽハしかし談話だけ分ッてもね、事が運ばないぢやァ困るから、兎も角も歸るまで待たう』

『おい〳〵誰か來てくれ、一人ぢや不可よ、そろ〳〵始まりさうだからよ、いえ何、先生、手前どもの事で、ハヽヽヽしかし先生、折角で御坐いますが、お待ち遊ばしても、無效ですよ』

『無效とは、今日中に歸れないといふンかね』

『いえ、手前の主人は旅行の外、歸らない筈は御坐いませンよ、歸る事は先生、きッと歸りますがね、さて歸ッたところで先生、無效で御坐いますよ、どういふ御談話か存じませンが、先生には以後一切、どンな事があッても、いかなる事情があッても、當分お相手にならないと申して居りますから、實は兼て先生へ願ッて居ります新體詩も、お謝絶いたさうかと申して居りますほどの次第で、なァに差上げた原稿料も過日の十圓も無論、其まゝでね、もし御起稿中の作物を他の書肆へ轉賣になッても、さらに差支ないから、今度お出になれば、よく其事を申上げて置けと、いはれましたので、甚だ失禮では御坐いますが、どうか當店への御相談は何事によらず總て一切、御免を蒙ります、つまり當店の如き資本の

手薄い容量の淺い俗な書肆としては、迚も先生のやうな高尚遠大な御著作を出版いたし兼ねまする結果で、かの文士方を伺ひ廻る男は、かう申して居りました、先生の御著述は先生の銅像が築かれて後、始めて世に出るンだから、まづこゝ百年や二百年では迚も出版の名譽を荷ひ難いと、實に先生を神樣のやうに恐れて居りますから』

いかに唯我獨尊の星影先生も、こゝまで平生の我田引水を會釋もなく切崩されては、流石に一言半句もなく、あッと呆れしまゝ小田の蛙の啼損ねたるが如し、

まして前夜よりは元の巣に歸れぬ身、今ここの文雅堂には嚙ンで吐出さるゝ如く、進退こゝに谷りし詩人の立往生、加之も人しれぬ胸に戀あり、人の見る前で此侮辱に遭ひ、もはや天地に倚るべきところなし、あゝ何とせむ、

星影先生、たゞ自己ばかりを人間以上に遠く飛放れたる雲中の靈物として、苟くも自己以外の他を見下すこと糞中の蛆蟲に等しく、口を開けば忽ち俗と呼び醜と叫びながら、その實は糊細工の如き案外の脆きところありて、文雅堂の店員に以後一切の關係を絶たるゝや否、あッと呆れしまゝ啞の如く顏色を失ひ度を失ひつゝ、さらぬも前夜より立倚る影を失ひし折柄、あはれ半泣の澁面に悄然として去りぬ、

星影先生の立去りしより凡そ二時間の後、わざと店頭を通り過ぎながら、俄に思ひ出せし如く立戻りて、入來りしは例の瀨田とよ子、

『あの、ちよいとね、あの何か新體詩の本は、ありませンの』

『入らッしやい、御坐いますよ、只今お目にかけます、よほど新體詩の作物も近來は多くなりまして』

『星影といふ、先生のですよ』

きくや否、店員いづれも思はず目と目を見合はせし視線、一時に瀬田とよ子の俯髪へ注いで、眉を顰めぬ、

『ヘエ、星影先生、はてな、どういふ先生ですか、もし御間違ぢや御坐いませンか、いッかう手前どもでは』

『あの、星影先生、當店に、當店が文雅堂さンでせう』

『いかにも、手前方は文雅堂ですが、その星影といふ先生は、よし他店の出版に仕ても、わけて新體詩の先生方は外の著者と違ッて數が尠う御坐いますから、お名前は悉く承知いたして居ります筈で、しかし、星影、星の影ですな、おい誰か店中に新體詩の作者で星影といふ先生を知らないか、何、そンな先生は日本にない、ハヽヽヽふざけた事をいふ奴だ、いや斷じて御坐いませンさうで、貴孃、失禮ながら、どこで御聞きなさいました』

『ちよいと、お友達に妾』

『そりやァ貴孃、きッと何かの、お聞違ひで御坐いますよ、なるほど、星の影といへば堂の香と流行の對句で、是非ありさうな名ですが、ハヽヽ事實、御坐いませンね、しかし名の知れない、書肆の相手に仕ない、つまり自稱自吟の方には隨分　なか〳〵恐ろしい大詩人があるやうで御坐いますから、その方面は格別ですが』

『おや、さうですか、お邪魔を仕ました事ね』

外の先生ではいけませンですか』

『いづれ、またね』

ふいと立去りし後姿を見送りて、文雅堂の店は俄の笑聲に溢れぬ、

『ハヽヽヽどうだい、星影先生にも愛讀者があるぜ、もう二時間も早けりやア、事だな』

『まだ出版も仕ないに愛讀者があッて堪るかい、ありやア此頃の式部淫賣かも知れないよ』

『や、さう考へて見ると猶更以て面白いね、實に妙だね、あの先生に今あの女とは取合はせが珍だ、よほど奇態だ、まるでポンチ繪だ、旦那の居ないのが、殘念だよ、見せたいね、ハヽヽヽ』

『神田の文雅堂は乃公が自由になる、とか何とか吹いたので、牝が香を嗅ぎに來たンだらう、ハヽヽヽとンだ香を嗅いで驚いたらうよ、ハヽヽヽ』

文雅堂の店員に殆ど冷笑の語氣をもて迎へられし瀨田とよ子、流石の面皮も聊か平生の彈力を失ひし心地、ほッと赤くなりて其まゝの足早に立去りしが、また思はず小首を傾け出しぬ、燒芋の薄と麪麭屑の境涯を、わざ〳〵訪來しは慥に出版書肆の主人、その翌日あの鄰屋の車夫が長屋中を鑑定の自慢顏に喚き散せし後、二三度も店員らしき男の訪來て本人また頻りに筆を執りつゝあるは正しく新體詩の原稿、わけて現在この身のために一夜その書肆へと言へば、尠とも忽ち言行一致の十圓を產出せしのみか、神田小川町の文雅堂とは本人の口より聞取りしに、その文雅堂が諺にいふ木で鼻を括りし挨拶、偖は妬み半分の惡戲に嘲弄せられしかと、今更腹立しき瀨田とよ子の膨れ面、いかにも前後の事實に照して無理のないところなり、

口惜しけれど腹は立てど、事實に於て當分まづ糊口だけは取止めたりと、著述の有無よりも戀よりも金と我身の事、俄に勢を得て其まゝ歸らンとせしが、念のため途中の或雜誌店へ立寄りつゝ、餘所ながら新體詩人の星影先生を問ひしに、ふしぎや其名も知らずといはれて、

また五里霧中の瀬田とよ子、はッと再び顰めし眉もろとも、さらに他の二三軒を探ればいよいよ案外の見當外れ、いづれも豆腐屋で鐵物の相場を聞くが如し、かうでは無い筈、かうあるべき筈なしと思へど、第一の文雅堂あの挨拶、他の書肆は猶更體に、現在の事實を事實とせる瀬田とよ子、ます〳〵迷うて夢うつゝの如く、たゞ茫として歩む折しも、背後より我名を呼ぶ聲、

『もし、ちよいと貴孃、伺ひますが瀬田さんと仰しやいませンか』

思はず振返れば、黒鴨の自用車夫、

『はい、妾、瀬田といひますよ、何か御用なの』

『只今、あれに主人が居りますから、もし瀬田さんと仰しやれば』

中腰の慇懃に車夫が指さす方を見れば、舶來の小間物商店より立出でし昔の友とは名のみの上田よし子、今は當世紳士として人に知られし川口保の令夫人、みる目も眩ゆきほどの盛裝を凝らしながら、わざと氣輕く足早に歩み來りぬ、

例の吉川實が事もあり、現在の我身は今かくの恥かしさに、はッと思へど遁げられもせず、はや眼前に迫られて照返さるゝ心地、加之も昔に變らぬ愛嬌は、却ッて變りし我身の果を嘲けらるゝが如し、

『瀬田さん、お久しう御坐います事ね、今あの店へ買物に來て居りま上たの、すると貴孃が、

ホ、、、、、しかし、いつも御機嫌よくて』

『上田さん』

『あら、上田の姓は御免を蒙りますよ、上田よし子は一切、只今は川口の妻で御坐いますからね、時に瀬田さん、先月、あの吉川とかいふ人を貴孃、わざ〳〵、ホ、、、直接、貴孃

が入らッしやれば宜いにさ、その節お手紙は確實に頂戴いたしましたよ、御親切に對して兎も角も百圓お渡し仕て置きましたの、お受取り下さいましたらうね、幸ひ、ついでですから、これだけ別に念を押すほどの事でも御坐いませンが、ホ、、、只今お住居は何處、電話は何番ですの、ちよいと貴孃おかけ下されば宅に居りますから是非、お近いうち、お遊びに入らッしやいな、お待ち申して居りますよ、いづれ、また』

すッと振返りて車夫を招きながら、さも馴れし體に身輕く打乘るや否、其まゝ韋駄天の如く馳去りぬ、

第一の的と思ひし文雅堂のために嚙ンで吐出され、もしやと思ふ他の書肆にも木で鼻を括られ、ぽッとして立歸る途中、また案外の不意に呼止められし上田よし子の爲、加之も今は紳士の夫人として眩ゆき盛裝に照されながら、殆ど侮辱的に電話の番號まで聞かれし口惜しさ無念さ、ぷる〳〵と怨恨の靡髪を顫はして泣くにも泣かれぬ澁面を作りし瀬田とよ子の顏色、

畫にも描けざる圖なり、

まして吉川實の手より受取りしは、その日の車代として三圓のうち二圓なりしに、百圓とは偖こそ、あッと呆れて驚いて今さら反返れば、あの三人が舌を出して抃舞雀躍しながら立去りし其時の姿まで、あり〳〵と目に浮ぶのみか、うか〳〵すれば浮世の外の半亡者と思ひし相手にも、わづか十圓の端た金にて其後の六七度を思ふ存分に慰まれし心地、

あまりの腹立に氣は遠く我を忘れて五體の中心を失ひつゝ、夢が夢中の小石に躓きながら、やう〳〵八軒長屋の自己が塒へ身を倒すが如く走入れば、今か〳〵と待受けし松坂あさ子、

一　顏色を變て聲を潛めぬ、

『瀬田さン、大變ですよ、どう仕ませう、前夜の事が、知れたやうですよ、あの空屋から

奥へ遁込ンだ片相手は、きッと貴嬢だッて』

『えッ、誰が、そンな事を』

『誰ッて、長屋中でさ』

『あら、妾、さうで無くッても口惜しくッて、あさ子さン、口惜しくッて堪らない事があるンですよ』

折しも表障子そッと開けて、差入れし面は例の朝鮮髯、前夜より腕を組ンで考へ込みし果に此奴いよ〳〵今日の音頭取なり、

『や、片相手が歸りなすッたね』

瀬田とよ子も進退こゝに谷りて、もはや居るに居られぬ破れかぶれの自暴自棄、さらぬも癇癪まぎれに墮落の本音を吹出しぬ、

『おや、貴君、妾に片相手とは、全體、どういふ事ですの』

『どうも斯うも前夜の内證、あの空屋の一件、ハヽヽヽ酷いぢやアありませンか、さンざ夜の夜半に長屋中を騒がして、それも宜いが姫ごぜのあられもない、だしぬけに飛出してさ、おまけに戸を抱いて打ッ倒れた本人は拙者ですぜ、その上を踏まれて遁際の後足に顔まで蹴られて』

『何ですッて、貴君、何と仰しやるの、前夜あの空屋から遁出した賊を、妾だといふンですか、妾、なぜ賊です、なぜ妾が賊です、貴君どこに證據を持ッて居なさいますの、まさか大道の賣卜から占ひ出した結果でもありますまいから、此まゝには承知しませンよ、いゝえ、あさ子さン、他の事と違ひます、妾の生涯に關するこッてすもの、貴君お這入りなさい、這入ッて下さい』

『ハヽヽヽ何も賊とは言ひませンよ、しかし空屋で闇がり紛れの云々、その二人の一人は確の星影先生が外へ遁出したまゝ今に歸らないといふ見當が付いたンです、して見ると脱穴の無い奥の方へ遁込ンで不思議に姿の消えた片相手は誰でせう、近ごろ十目の見るところ長屋中の相場が既に極まりましたよ、ハヽヽヽしかし、お氣の毒でしたね、さういふ事と知れば、わざ〳〵這出して往ッて御娯樂の最中を破るンぢやァ無かッたに、拙者また踏ンだり蹴ッたり仕られ無くッても濟ンだにさ、なァに御相談に依ッては宵から夜半まで家に居らない業體だ、どうせ不在中お貸し申してもね、ハヽヽヽヽ』

流石の瀬田とよ子、ぐうの音も出ず目を剝いて上唇を噛占めながら、思はず差俯きし折しも、また一人の寄手は例の熊さン、勢ひ込んでの大聲に喚き出しぬ、

『八卦屋、賴むぜ、しッかり遣れ、乃公が付いてるぞ』

朝鮮髯まづ先鋒として攻寄せし背後より、例の熊さン今日の一日これがために休みしほどの勢ひ、わけて星影先生を失ひし癇癪まぎれの大聲、瀬田とよ子の頭上も割るゝばかりに吐鳴り込みぬ、

『おい八卦屋、そこ退いた、新手の熊さン入れ替りだ、時に廂髪さンへ、どうしたもンですい、こンな事のねエ前に言ッたンだぜ、ふざけた調子に乘ッちやァ、いけねエよ、をかしな眞似を仕なさンなと、えエかう、忘りやァ仕めエ、つい過日のこッた、どうせ相手の遁廻ッた迷惑を無理無體に引摺込ンだ業だらうが、よしてくれエ、猫が魚類を取ッたやうに空屋なンかへ咬へ込ンでよ、太エ女だ、全體、あの先生ァ乃公が氣に入ッて平生から贔屓にする先生といふ事が分らねエか、いくら先生の方が油斷あッたに仕ろ、うぬのやうな阿魔ッちよの自由にされて堪るかい、第一この熊サンの男が立たねエぞ、さァどうしてくれるンだ、

それに何だと、今聞いて居りやァ妾は賊でねエ、べらぼうめ、人の物を取ッた盗賊の方はな、罪が淺くッて後の始末が宜いンだ、考へて見ろ、お可哀さうに先生は人が善くッて根が正直だからな、驚いて外へ遁出したまンま未だに歸ッて來なさらねエが、うぬの方は女の癖に平氣の面で、しやァ〳〵と畜生、恥を知れ恥を、夏の蚊だッて刺し損ッちやァ一時、ちよいと面目なくッて、どッかへ飛ンで行くもンだぞ、おい、對當に向ひ合ッても嫌に出張ッた廂髪で滿足に面の見えねエ女だ、ぐッと上げろい』

鄰屋のお虎婆、不意に皺くちや面を突出しながら、例の十圓その一割を貰ひしだけは確に饒舌りぬ、

『何だね熊さン、自分が跡取の若息子を近處の後家に取られたでもあるまいし、さういふもンでないよ、空屋でも簀子の下でも宜いぢやァないか、お互に承知の上で他人の迷惑にならない事を仕たンだからね、ハヽヽヽ熊さンは兎も角、おい八卦屋、汝は何だ、平生から一方の片相手と取わけて別懇にでも仕た交際かね、いゝ年を仕やァがッて、物の正體も見定めず夜の夜半に騒ぎ出すからだ、近所に事なかれといふ理由を知らないか、痩ッこけた面で妙に出洒張ると爲にならないよ』

八卦よい屋、はッと思はず凹めば、ぬッと出る熊公いよ〳〵勢ひ猛なり、

『やい〳〵死損ひめ、默ッてろ自分の息子を近處の後家に仕てやられりやァ、却ッて親の面倒は助かるが、あの先生を此、おたンちンに喰しちやァ承知の出來ねエ熊さンだ、第一かういふ時は善くッても悪くッても攻手に加はる奴が、今日に限ッて防ぎ手とは妙だ、ハヽァ婆め幾何か舐めてるな、さうで無くッて今まで面も出さずに辛抱の出來る奴かい、おい八卦屋、千三屋も饒糞屋も呼出して來い、かうなりやァ長屋中の大評議だ、相手を叩き出

すか此方が出るかの境目だ、さア覺悟しろ』

熊公いよ〳〵騎虎の勢、この八軒長屋に於ける自治體の制裁力を持出しぬ、

戀は神聖にして愛は生命の露といふ瀬田とよ子も、一切の物質外に超然として理想圓滿なる大詩人の星影先生も、事實は向島の牛の御前に神聖の境内を汚して木下闇の轉び寢に始まり、その最終は猫の如く長屋の入口なる空屋の闇黑まぎれに生命の露を吸合うて、加之も鄰屋の朝鮮髯に理想の圓滿最中を驚かされ、内と外とに狼狽へて逃出せしまょの別離とは、山嶽震動して鼠一疋の飛出せしよりも果敢なし、

されど星影先生は多少まだ流石に良心の捕虜となりて、どこへ彷徨ひ行きしやら、あはれ其まょ歸らねど、瀬田とよ子は事いよ〳〵露顯の曉、なほ依然として平氣に濟し込みしがため、果は長屋中の包圍攻撃に逢ひ、自治體の制裁力に攻められて居るにも居られず、松坂あさ子もろとも河豚の如き膨れ面を叩き出されぬ、

あとには熊さん、外に用なけれど夫婦が半歳分の齒磨きに貯へし鹽を兩手に掴み出して、長

屋の入口より奥まで初雪の如く蒔散しながら、朝鮮髯と石作を相手に例の高調子、

『清淨々々、まづこれで化物を退治て仕舞ッたから、どうか斯うが氣が濟ンだよ、ハ、、、、しかし石作さン見たかね、あの廂髪め、いやに恨めしく乃公の面ばかり睨ンで出やァがッたぜ、だが怨恨は乃公よりも八卦よい屋にある筈だ、ハ、、、』

『いや、少々ぐらゐ怨まれても宜いね、朝夕あの變な面を見るよりやァ優だ、拙者この身に取ッては別段これといふ關係もないが、ふしぎに氣の食はない女だよ、あゝいふ正體の知れない怪物が居るから一蓮托生、いづれも今まで運が向いて來なかッたンだぜ』

『さういへば、いよ〳〵これから福の神が舞込みさうたが、まだ怪しいぜ、八軒長屋のうち急に三軒の空屋が出來たからね、兎も角この三軒の空屋へ落込ンで來る奴を見屆けた上のこたッ、偖どういふ奴が浮世の床板を踏外して來るか、例の破戸書生や今の廂髪に輪をかけた連中ちやァ叶はないぜ、ねェ熊さン』

『眞實だ、しかし野郎は野郎で、まだ何とか仕末は宜いが、掘返して蓮根にもならねェ當世流の蓮ッ葉ばかり、ばさ〳〵とした女ァ御免だぜ、どうだ、大屋には濟まねェが、以來この長屋を女人禁制と仕ちやァ、お虎婆は偖置いて、公乃の嚊ァは別だよ、ハ、、、、』

『や、面白い、面倒が無くッて宜いよ、ねェ石作さン、お互に情婦は外で持つ事と極めてね、ハ、、、、』

『さうさ、到るところ情婦に追廻されて、いつ何時こゝへ押寄せらるゝか知れない身分だからな、結句、さうなりやァ枕を高く安心して寢られるさ、ハ、、、、』

折しも正面の總雪隠より悠々と罷り出でたる鑛糞野郎、洒落かと思へば眞面目に不服を唱へ出しぬ、

ちょいと待ッて貰はう、今月の下旬か來月の初旬には、愈々九州の金山一件で芽を吹出す筈だからね、誰いふとなく傳へ聞いて、また昔剛染の女が尋ねて來ないとも限らないよ』

已むを得ざる境遇に迫られて一時の方便上、有形の肉體は横へても無形の愛は動かさねといふ、その一時の方便に供せし星影先生の行方を失ひしのみか、文雅堂のためには嚙ンで吐出され、他の書肆には木で鼻を括られ、ほッとして歸る途中を昔の友に呼止められて殆ど侮辱的に扱はれ、わざ〳〵往來の中央に當世紳士の夫人盛裝と、落果てし我身を對照されつゝ、口惜しまぎれに走歸れば待受けし長屋中の爲包圍攻擊せられて流石の瀨田とよ子も居るに居られず叩き出されし半泣の澁面を、そも〳〵この上の浮世いづこの穴へ持ッて行くべき、尻輕に渡り歩く奉公猿の下女と一般、出るにも入るにも荷物は風呂敷包だと一個の境涯ながら、組ンで落されし松坂あさ子、あまりの不意に驚いて元來の靑ざめし顏色、猶更靑く目はかり光りぬ、

『どう仕ませう瀨田さン』

『どうッて、かうなッた以上、もう仕樣が無くッてよ、兎も角も十圓のうち、まだ六圓ばかり餘ッてますからね、此お金の盡きない間に何とか、あさ子さン、善後策を講じて』

『だッて口惜しい事ね、あンな無敎育な劣等な、車夫や賣卜者のため强迫的に出されたと思へば、妾、口惜しくッて、どう考へても瀨田さン、口惜しくッて堪りませンわ、これ以上の殘念な事はありませンよ、自然の運命に迫られて出るンぢや無いンですもの、つまり彼等のため、あとで手を拍ッて笑はれる材料を遺して來たンですからね』

『しかし、あさ子さン、取るに足らない彼等ですよ、妾だッて、貴孃だッて、まだ彼等のた

め復讐の方法を求めるほど、そこまで墮落して居ないンですからさ、それよりも眼前の方向で・すよ、ねェあさ子さン、妾、ふと考へたの、かう仕ては、どうでせう、妾と違ッて貴孃ア幸ひ、小石川の原町とかに親類があるンでせう、ですから暫時、その親類の方へもし妾等の身に此上の悲境が來るものとすれば、知りつゝ徒に伴ッて居ても、つまりませンよ、今のうち貴孃だけでも出來る手段を取ッて、時機を待ッた方が策の得たもンかと思ひますの』

『親類は親類ですが隨分、これまで迷惑をかけて、世話になッたまゝ一二年も訪ねない親類ですからね、どうせ故郷の方からも其後、いろンな事を言ッて來てるでせうし、猶さら妾、また妾が、その方へ行くとして貴孃、瀬田さン　今後、どうなさる決心ですの』

『妾は妾で、決心した事があるの、もう二月で、亡て來る情人でせう、だから妾それまでの間は、どッか所謂る慶庵の手に掛ッてでも凌ぐ方法を付けますからね、この六圓のうち二圓だけ貴孃へ渡して、あとの四圓で妾、きッと身を處して見ますよ、小石川の原町で何番地の何といふ親類か、それさへ分ッて居れば妾、あの情人達の出る前に必ず、萬事の打合せを仕ますからね、あさ子さン、斷じて貴孃さうなさいよ、さうして下さいな』

どうしても瀬田とよ子は松坂あさ子より常に策謀多く罪深く、うき世の業には一枚の上に出來たり、

業平町の八軒長屋、さても落果てし人間の底かと思へば、底の底ありて下の下ゆく浮世の流れ水、あはれ假にも我家と定めし塒なれど、こゝは其日々々の化物が入相の鐘もろとも四方より落合ふ木賃宿、上野の山の彼方なる金杉町を通り過ぎて、千住大橋の此方なる場末に軒

を竝べし三の輪新町これなり、

降る雨の簑輪の里に袖ぬれてといへば、情の廓も近き紙衣の末、何とやら昔の名殘に風流めけど、今は文字さへ錢勘定の三輪となりて新町とはいへど、ふるく破れし叩き屋根の軒竝びに木賃宿の掛行燈、廂は傾き柱は歪みて一種の悪臭を籠めしも道理、いづれ眞直に世を渡りて馨しき匂する奴の半時も居れぬ場所り、

上等の別室ありといへるが八錢より十錢、普通一帶が五錢と六錢の間、加之も夜だけの事、平均の一個月に積りて二圓内外とすれば、月に七十五錢といふ八軒長屋の九尺一間を晝夜我物の二錢五厘づゝに比べて頗る案外の高價なれど、みす〳〵それを拂うても同じ塒には住めぬ奴の落込むところ、無い時は平氣の鼻唄三昧に野宿する徒輩の轉げ込むところなり、木の根を枕の露に輕く身を横へし事はあれども、流石に秋の夜長を只一人の野宿も仕かねて

や、この三輪新町の木賃宿を時に取ッての便利として宵闇の掛行燈うす闇き物影より、こそこそ入りしは例の瀬田とよ子、十錢の別室とは本人いまだ此里に落切らぬ覺悟なり、別室といへど破疊二枚、たゞ知らぬ他人と不意に枕を竝べて睡らぬといふだけの事、煤けたる反故張の障子一重を隔てゝ鄰席の別室には、また同じ流れの身の末を置く奴ありて、加之も如何なる荒くれ男ぞ、もし夜の夜半に何事ありとも、人殺しの外は驚いて救ひに來るほどの宿でなく、其まゝの腕力沙汰に逢ふべき筈と思へば、うか〳〵夢も結ばれず、いかな瀬田とよ子も今さら心細く薄氣味わるし、

手細工の鴨居を宙に渡して、取合の柱に懸けたる豆ランプは荒土の食出でし天井に油煙を吐きつゝ、その下を隔てし反故張の障子際、いとゞ薄闇きを僥倖、せめて鄰屋の人相を見て置かンものと、こゝまで落ちても猶まだ我身の惜しき瀬田とよ子、そッと破れ目より差覗けば、

壁に倚りて痩せたる達摩の如く膝を組みながら、無言のまゝ兩眼を閉ぢて沈思默考の男、加之も鼻頭の眼鏡に頭髮の頸首まで伸びし體、や、や、正しく星影先生なり、

例の朝鮮髯に驚かされて空屋より飛出せしまゝ、夜一夜を彷徨き廻りし翌日の朝、また文雅堂のために案外の一發を喰されて、いよ〳〵進退こゝに谷りし最後の果は、あはれや十月の寒空に肌薄き單衣の重ね著、その一枚を脱いで途上の屑屋より得たる二十三錢も、今夜の六賃宿に盡きなンとする星影先生、もはや人間の末なり、將に痩こけたる死骸を路傍の俗塵へ埋めンとする間一髮に近づきぬ、

壁に倚り膝を組ンで目を閉ぢつゝ、いかに沈思默考すればとて、眼前に迫り來る浮世の事實問題は緣遠き新體詩の高尚幽玄を以て解決し難く、理想も神韻も今は一碗の冷飯に代難き苦痛慘憺の極、猶さら空腹に力なく身は疲れ夜は更けて、たゞ茫然たる折しも、いづこよりか耳に入る聲、

『先生、先生』

はッと思はず見廻せど影なし、

さては戀、恐るべし人は心の器、その器の衰へしと共に心まで弱り果てゝ、自然に物の響くが如く我みづから我を夢うつゝに呼びしかと思へど、また確實に聞ゆる聲、

『あら先生、妾ですよ』

隔てし反故張の障子、そッと開けて差出せし顏を、鴨居の上より幽かに照らす柱懸の豆ランプに一目みるや否、星影先生、臍の中央に錐を揉込まれし如く、あッと驚いて鼻頭の眼鏡を振落しぬ、

『やッ、せゝ瀨田さン、ぢやァ無いですか瀨田さン』

『ないわ、あるも、貴君、酷いわ、先生、酷いわ』

『どうして、かういふ、こンな、ところへ全體、どう仕たンです』

『妾より貴君こそ、どうして先生、まアこゝへ』

『僕、僕は、や、僕は、あの夜、あの後の僕は、實に、殆ど』

『妾も先生、あの時ね、あの時は夢中でしたが、あとで妾、あれがため妾の苦痛と悲哀は、迚も貴君の想像に及ばないほどの事があッたンですよ、もう此儘貴君を見る事が、出來まいかと思ッて妾、悲泣の極に沈ンで仕舞ッてよ』

『兎も角、ふしぎですな、妙ですね、實に奇遇だ、僕が今夜こゝで、貴孃に逢ふとは、たゞ意外といふ以上に適切な言葉を持たない、わづか中間一日で、やう〳〵三日目だが、もし再會の期なくば遂に長く人にも語れない胸に忍ンで、互ひの生涯に於ける祕密の涙となるべき僕と貴君と、その三日目の今日、や、正に人爲的でない、つまり俗にいふ自然の緣なるもンでせう、しかし、どうして、かういふところへ』

『それが先生、妾、口惜しくッて、さう急には到底、言ひ盡くし得ませンもの』

『なるほど、さうあるべき筈ですな、僕が思ッてるよりも、より以上に女としての貴孃は、無論、さうでせう、いや僕は只こゝに感謝の外ないですよ』

星影先生も思はぬ不意の案外、瀨田とよ子も思はぬ不意の案外、業平町の八軒長屋より三輪新町の木賃宿といへば、運命の順序に於て何の不思議はなけれど、こゝで落合ひし互ひの意外と意外に驚きつゝ、聲を潛めて語りぬ、

『だッて先生、今いふ通りの目に逢ッたンですもの、殆ど侮辱の極ですもの、いくら妾でも、忍びませンよ、居るに居れませンわ』

『や、實に殘酷な奴等だ、車夫の熊なるものは兎も角、まだ多少その間に恕すべき點のないでも無いが、あの賣卜者め、けしからン奴だ、ところで、あさ子さンは、どうしたです』

『あの女は、小石川に親類があるンですから、無理に、便宜上その方へ、妾だけ、已むを得ず、こンなところへ』

『よろしい、さらに僕が今後の事に一考しませう』

『しかし先生、貴君、あの机も書物も、第一あの原稿も其まゝなンでせう、また妾、貴君に聞きたいの、たしか貴君の出版書肆は、神田の小川町で、文雅堂といふンですね』

『文雅堂です』

『あれ、不思議だ事』

『どう不思議です』

『實は先生、妾、あの翌日、もし先生がと思ッて、その文雅堂へ、それとなく尋ねて行きましたの』

『えッ、文雅堂へ、僕を、むゝさうですか、店の奴等、どう言ひましたね、事に依ると何か、殊更に設けて悪く言ッたでせう、平生の僕を僕として見る文雅堂だから、や、驚いたらう、ハ、、、僕としては尋ねて來べき筈のない女だからな、ハ、、、』

星影先生、流石に今この場合それともいはれず、はッと思ふや否、元來の不得手ながら時に取ッての世才を絞り出して笑へば、固より或點まで事實に遭遇せし瀬田とよ子、猶さら自己が身の利慾に引かれて、いよ〳〵それかと思ふ體、

『ほンとに口惜しい時には、何故かう口惜しい事ばかり重なるンでせう、文雅堂の店で貴君、先生の名も、知らないといふンですもの、つまり妾は馬鹿に仕られたンですね、嘲弄

しられたンですよ、惡戯はれてさ』

『ハヽヽヽどうも書肆なンかに居る店員は、人が惡くッて困るよ、ハヽヽヽ』

『しかし先生、貴君、まだ文雅堂へ往ッしやらないの』

『實は今いふ、その原稿を、あのまゝ捨てゝ出たからね』

『もう、業平町へは、お歸りなさらない決心でせう、妾も、かうして出たンですからね』

『無論、歸れないね』

『それでは貴君、原稿も、ついでに他の物品も一切、お取寄せなさいな』

『さア、その取寄せるに就いてだ』

『入らざるこッてすよ、彼等に遠慮も何も、自分の所有物ですもの、幸ひ鄰屋で萬事、貴君に近しかッた、あの車夫の許へ誰か往復の賃錢に手紙を添へて人を遣れば當然、その使者に渡しませう、渡さずに居れますまい、かりにも故障のいへない事ですから』

『なるほど、さうだ、そこに氣が付かなかッたよ』

『ホヽヽヽあまり先生は、放任主義に過ぎますよ、もし今夜こゝで逢はなければ妾も、あのまゝ放任しられて仕舞ッたンですね、ホヽヽヽ』

八軒長屋の門口に屑屋の荷車を置いて、そのまゝ入りし男、

『ちよいと伺ひますが、此お長屋に熊さンといふ人が』

折しも出合頭の熊公、

『わッしが熊だ、しかし汝さン、何の用だい』

『手紙を、この手紙を御覽なすッて』

『何だ、手紙だ、間違ぢやァねェか、手紙なンかァ受取る相手のねェ人間だ、全體、どこの誰だい』

『いへ萬事その手紙にあるンですから、實ァ御鄰屋に居た人の雜物一切を買ッた屑屋ですよ、手紙は賣渡した本人の證據ですからね、御面倒ですが、どうか立合ッて貰ひたいンです』

『や、先生だな、おい八卦屋、ちよいと出てくれ、汝の役に立つ事が出來たい、この手紙だ、讀ンでくれ、さァいよ〳〵所在が分るぞ』

『はゝァ手紙かね、なるほど、人間には聊か覺束ないところもあるが手跡は美事だな、よく達者に書いてるよ』

『文句だい、早く文句を讀まねェか』

『むゝこりやァ熊さン、かういふ文句だよ、長らく世話になッた禮を厚く陳べてね、さて其まよゝ捨置いても宜い品だが都合上此ものに渡してくれ、いづれ近日あらためて出るといふンだ、つまり先生、もう歸らない決心で、品物を取りに來たンだ』

『おッと、よし、それで宜いぞ、役目は濟ンだ、餘計な口を出すな、引込ンでろ、時に屑屋さン、本人の所有を本人の手紙で取りに來たンだから、誰ンでも渡す事ァ渡すがね、この本人は今、どこに居るンだ、是非、逢ひてエ事があるンだから同伴に行かう』

『そこですよ、それに付てさ、どういふ理由か知りませンがね、實ァ言ッてくれるなと、確く賴まれたンです』

『賴まれたッて、言へねェ事ァ無からうよ、言つたッて差支のねェ乃公だ、さァぐづ〳〵言やァ乃公が持ッて往ッて本人に渡す分だ』

『しかし、差支が無きやァ渡して下さいな、それがため、その手紙にある通りですよ、ね、

嘘でない證據は一閑張の机と白の古毛布二枚と、三尺の吊戸棚に雜誌類が三四貫目と、硯に筆に墨さ、別に洋書が三册と何だか佛臭い經文の巻いたのが二本、改良半紙を綴ぢて細ツかく書きかけたものが二册、どうです、間違ますまい、かういふ工合に品物を聞いて、物を見ない前に大ざッぱいの相場價で買ッて仕舞ッたンですよ、もう錢は渡して仕舞ッたンですからね、よし居所を言ッたところで本人は居るか居らないか分りませンぜ、つまり安ッぽい足の早い宿屋で一夜宿泊のこッてさァね、ハ、、、』

『おい屑屋、目を開いて見ろ、こゝァ業平町の八軒長屋だ、華族の隠居が住ンでる別荘ぢやァねエぜ、べらぼうめ、安ッぽい一夜宿泊で品物も見ねエ手紙一本に前錢を拂ッて來る奴があるかい、さァ本人どこだ、白狀しろ』

『そりやァ困るンですよ、實は本人に頼れたンぢやァないンですからね、その宿の亭主が引受けて、確く約束したンですから、しかし手紙は本人の手紙で品物も本人の品物とすりやァ、文句のない筈だ、まさか汝さンに差押へられてる理由もなからうし、たゞ立合ッて貰うだけの事さ』

『おい八卦屋、また汝の役が出來たよ、乃公に手紙を一本書いてくれ、相州鎌倉の空屋へ忘れて來た金の茶釜を此屑屋に賣るンだからな』

はや喧嘩腰にならンとするを、家内より女房お菊そッと招いて耳に口、何をか私語けば熊公おもはず首肯きぬ、

『なるほど、それも然うだな、自分の所有になるぢやァなし、つまらねエ他人のこッて爭ッてるより身の稼ぎが大切だ、ぢやァ出るぜ、おい屑屋、乃公の代理に嘘アを殘すからな勝手に持ッて行きねエ、面倒だァ』

もし星影先生は新體詩といふ不治の難病さへなくば、元來の惡人でも愚物でもない今年二十九の男、こゝまで浮世を踏外して落込む筈はなけれど、人事一切を其まゝ詩化して味噌も糞も高尚幽玄の理想に當行はンとするがため、いよ〳〵人間の緣に遠ざかりて衣食住の道に疎く、わけて戀といひ愛といへば猶更の夢が夢中に嬉しく有難く、瀨田とよ子の如き女に對しても目鼻を失ひつゝ、只これ感涙の外なし、

加之も案外の木賃宿にて思はぬ意外の奇遇は、殆ど狂するばかり感謝の念に我を忘れて、神の力に引合されたるが如く隨喜渴仰の涙に咽び返り、もはや自己が生涯の運命を擧げて彼が一顰一笑に投ずるも惜しからぬ體、いふがまゝに手紙を認め宿の主人に談合して、幸ひ同宿の屑屋を八軒長屋の古巢へ遣りしが、たゞ心に恐るゝは熊公の事、兼ての氣性、我への深切に

出過ぎて、もしや喧嘩腰に渡すまいかと思ひの外、無事に一切の品を持歸りしかば、本人よりも瀨田とよ子、まづ小氣味よしと胸の溜飲を撫下しながら手を拍ツて喜びぬ、

固より内兜を見透せし屑屋の踏倒ながら、夜店に曝して一册づゝ賣行く品と見て取りて雜誌四貫七百目で一圓五十錢、古けれど西洋洗濯にかけて店頭に吊れる品と見込みし白毛布二枚が一圓、一閑張の机は木賃宿の亭主に叩き落されて十二錢、以上あはして僅かに二圓六十二錢も、折柄の大金、まして西哲の詩集三册は神田の古本屋に拋出のまゝ二圓の價値あり、紺紙金泥の佛典二卷、いかに安くとも七八圓の價値あり、さらに第一この新體詩の原稿を仕上げし曉は二百圓と聞くや否、瀨田とよ子猫の如く咽喉を鳴して喜びぬ、

『だから妾、いふンですよ、貴君、これほどの物品を、置去してさ、もし貴君この原稿を、あのまゝ彼等俗物の手に委して御覽なさい、勿體ない、たゞ鼻紙になるばかりですよ』

『ハ、、、しかし、いくらでも頭腦にあるンだからね、僕としては、さう惜しくもないさ』

『惜しくなくッても、いくら頭腦の中にあッても、時間と勞力が費されてるンですもの、あまり先生は物事に淡泊すぎますよ、將來は妾が、どうしても、いかなる悲境にも伴ッて、出來るだけの事をする決心ですからね貴君、以後一切、妾のいふ事を反いては、いやよ、いけませンのよ、宜しいか』

『たゞ感謝するのみだ』

『時にね、前夜からでせう、まだ朝も喫べないンですから、晝飲には早いが、何か妾、買ッて來ませうか』

『や、さうだね、麪麭が宜からう、手數がなくッて、ついでにバタの小さな罐を一個ね』

『勝手は分りませンが、どッか其邊で、尋ねて來ませう』

六圓のうち二圓を松坂あさ子に渡して、自己は現在まだ四圓といふ金を懷中に捻込みながら、今しも屑屋より受取りし二圓六十二錢を其まゝ胸帶の間に插みつゝ、出行く後姿を額越の星影先生、あはれや滿身の敬愛をもて見送りぬ、

はや喧嘩腰になりかけし熊公、そッと女房の入智慧を小耳に插むや否、俄かに音なく靜まりて、わざと其場を外せしが、實は星影先生の雜物を持出せし屑屋の影より、身を潛めながら慕ひ行き、せめて神田の書肆に緣あるところと思ひの外、三輪新町の木賃宿いよ〳〵穴を見付けたり、さては先生こゞだなと思ひしが、あの穴屋一件に狼狽へて飛出せしまゝ、身の置どころもなく恥ぢて忍びし隱れ家を、だしぬけの不意に驚かさば却ッて我眞情の通らぬ筈、もしや姿の見ゆる事もあるかと、その門邊を三四度も行きつ戻りつ窺ひし折しも、例の麪麭を買

はンとて立出でし瀬田とよ子の姿に流石の熊公、あッと驚きぬ、

己ぬる哉と天を仰いで歎ずべきところを、熊公おもはず蟋蟋の如き舌鼓を打鳴しながら、無效だ、いけねエ、あの畜生が同じ穴たァ驚いた、もう飛込ンで諫言するだけの事ァねエ、おさらばだと思ひ切ッて其まゝ走歸ッたる熊さン、無學文盲の一本調子なれど、幽玄高尚の理想が詩的に腐りついたるよりは遙かに立優りし男振なり、

八軒長屋の我家に飛込むや否、ふンと鼻頭に冷笑うて襤褸みの古手拭を輕く拋出しながら、女房お菊の面前に大胡坐、

『おい嚊ァ、杜が曲折れて仕舞ッたい、ぴしやりと丸潰れだァ』

『何だね、妙な顔を仕てさ、良人さン、あの屑屋に隨いて行かなかッたの、先生の居所が分らなかッたの』

『分ッたから驚いたのよ、三輪新町の木賃宿だァ』

『おや、木賃宿だ』

『それが先生ばかりぢやァねエよ、どうして落合ッたもンか、まさか狼狽へて窓口を飛出した騒ぎに打合せも出來めエが、ふしぎに一方の阿魔ッちよが居るぜ、いけ酒ァ〳〵の例の廂髪を、おッ立てゝね、あれぢやァ、もう乃公も飛込ンで彼是いふ氣がねエからな』

『あら、まァ、どうして、へエ、恐れ入ッたもンだね』

『恐れ入り過ぎて呆れの宙返りだ、乃公ァ只、きまりが悪くッて二度と再び顔か出せねエと、ふ先生の初心を猶さら高く買込ンでわざ〳〵往ッたンだぜ、雜物ァ一旦、屑屋に渡しても、なァに汝、物も見ねエで前錢を出す筈ァねエからよ、直接また乃公が荷いで先生を引戻す氣だァね、ところが、あれだ、畜生、あの阿魔の業と睨ンで脈を放して來たのさ、惜しい

先生だが、もう無效だ、骨まで喰込まれてるからな』

『ほンとに、腹の立つ、小面の憎い女だねェ、折角あれまで陰になり陽になり、いろンな氣を揉ンで世話した先生をさ、さういふ馬鹿に仕やァがッて』

『しかし、先生も今となッちやァ、まづいよ、仕方が宜かァねェよ、いくら何だッて、あンまり安ッぽくて、だらしが無くッて、甘すぎるからなァ、第一この乃公が長屋中の手前、口にも出せねェよ、おい嘴ァ默ッてろ、先生の事ァ一切、これッきりだよ』

もう無效だ、いけねェ、脈が上ッたと例の熊公にまで見放されし星影先生、いよ〳〵瀨田とよ子に喰付かれて、魂魄ぬけ殼の五體となりぬ、

されど先生は人しれず愛の神に包擁せられたる心地、三輪新町の木賃宿に假寢の夢も詩的の理想と其まゝの觀念、かの屑屋に賣飛せし雜物の二圓六十二錢いまだ半を餘せるに、また牝鷄の羽ばたき激しく、殘れる洋書三册と經文二卷これも錢にせよとの時啼を作りぬ、

何事も唯々諾々の先生、實は我ための六韜三畧とせる西哲の詩集三册、惜しけれど愛の露には代へられず、二圓五十錢に拋飛し、かくなりし今までも祕藏せる紺地金泥の經卷二本を骨董屋に踏倒されて三圓、あはして五圓五十錢を持歸れば、瀨田とよ子また今更に溢るばかり滿面の笑をもて迎へぬ、

『ねェ先生、いつまで貴君、こンなところに居ても、つまりませンわ、ちよいと手輕で便利で安いやうで、事實の打算上は案外に高いンですもの、第一、性格の違ッた下層の劣等物ばかり集ッて來て妾、いやですわ、嫉妬半分に貴君、いろンな事を言はれてさ、此お金でどッか、また、業平町のやうな家を持ちたい事ね』

『なるほど、さうだな、到底こゝは我々の居れる場處でないから』
『また貴君、原稿を書くに仕ても、こゝでは仕樣がありませンよ』
『いかにも』
『ですからね、至急どッか、探しませう、たとひ何がなくッても、冷かな物質より互ひに心の暖かな方が滿足ですもの、つまり貴君と妾と人生に於ける最も幸福のホームを作るンでせう、妾、一日も早くね、それが希望ですの』
『や、人生これ以上の幸福はない、實に愉快だ、もはや他に驚かされて逃出すにも及ばないからな、ハ、、、、、』
『ホ、眞實ね、ホ、、、妾、あの時の事を思ひ出しても、まだ胸が、變な氣になりますよ、あまり不意の恐怖に打たれてさ、生れて始めてですもの、よく怪我も仕なかッた事ね、ホホ、、』
『しかし、虛僞なき愛は自然、いかなる危急も神に守らるべきもンだからな、强き刃には敵ありとも、淸き戀の前には敵の來ないものさ』
『あら、事實ですね』
『ところで、家は、どの邊に』
『妾、今日か明日か、きッと二日のうちに探して來ますわ、その間に貴君、神田の文雅堂へ往ッて、何とか多少、どうせ貴君、脫稿すれば取れるンでせう、それを今、目下の急務に幾何か、必用なンですもの、二人の身を容れる家だけは出來ても、此お金は一週間か十日の後すぐ、盡きて仕舞ッてよ』
『だが、さう急に迫らなくッても宜からう、賣文的の著者は兎も角、僕としてはね、どうも

困るよ、第一さういふ事に就いての技倆は殆ど零だから、まづ一週間もあれば、ゆるゝ考へてね』

『では、かうなさいよ、兎も角も家を持ッて、すぐ其日に手紙を文雅堂へ、まさか捨て置きますまい、德義上、利害上、必ず誰か來るでせう、おや、妾、その時に居ては、變ですね、過日あの店頭で惡戯れたンですから』

『その邊もあるよ、すぐ顏を見せても、をかしいからね、や、三四日も過ぎてから、やはり自分に出かけよう、いつか十圓を取ッて來た流で』

『あの十圓、貴君、どういふ工合に、取ッて入らしたの』

『なァに、これまで一度も僕から金錢上を談じた事はないよ、あの時は、わざと俥に乘ッて往ッてね、おい車賃を拂へと言ッたのさ、すると流石に商人だね、わづか二十錢や三十錢を原稿料の內で引去れないから、途中で何か御買物なすッて下さいといふ口實の下に十圓紙幣一枚を出したよ、實に機敏なもンだね、ハヽヽヽヽヽヽ』

『書肆も機敏ですが、ホヽヽ、貴君も案外策のある事よ』

『ハヽヽ、何のために、あンな名策が出來たらう、ハヽヽヽ』

星影先生の塒と瀨田とよ子の塒とは、逆向ふ一時に俄の貸家札を張られて、どら猫の戀にも劣る一片の笑ひ草を長屋中に殘せしが、その色沙汰の飛出せし入口の空屋、例の吉川實が古巢を塞いで、いづこよりか落込來りし奴あり、

八軒長屋の生活上、固より世帶道具のなきを怪しまず、身に從ふ妻子なきを怪まず、たゞ怪しむは盛蕎麥一個づゝ、近處合壁の義理人情も濟むべきところを、ざる蕎麥三個に正宗の二

合瓶一本づゝを添へて配りし大福長者、そも〳〵この長屋には開闢以來の珍事なり、加之も本人の容貌風采、いかなる者と見れば、永字八法の點に似たる滑稽的の眉毛びく〳〵と動かし、への字形の下り目に四邊きよろ〳〵見廻し、鼻は自然に天井を仰ぎ齒は緣の下を覗ぎ込むほどの醜男ながら、ちらと遠目の一德は元來の色白に七難を押祕せし年輩二十三四の小品、聊か著古したれど絲織の袷に荒き大名縞の同じ羽織、そろりとして懷手の澄し鹽梅、お納戸に一本獨鈷の博多帶、わざと自慢氣の素足に履物ばかりは新らしき兩ぐりの表附、聊か擦切れし黑八丈の襦袢襟をり〳〵氣にして押込めど袖口の色褪めたる鼠縮緬ちよろ〳〵無遠慮に這出しつゝ、てか〳〵光る出額いかに靡き上げしぞ、薄ッぺらな上脣を例の反齒へ被せし三角の尖り頤、殊更に身輕く自己を卑下するやうなれど、また人を冷かし半分の馬鹿にするが如き風ありて、好かぬ吹出し烟草もろとも一種異樣の聲に呵しくもない事を打笑ふ工合、田舍大盡の親を持ちし放蕩書生の果でもなし、商人の大家を叩き出されし若旦那の末でもなし、職工には猶さら不似合なり、迚も勞働者の筈なし、固より會社員としては受取れぬ男、いづれ世の中に在ッて用なき奴の一蓮托生ながら、これは案外、さりとては不思議の怪物、いよ〳〵この八軒長屋に巢を構へたり、

件の怪物、件の風俗態度を以て、熊さン朝鮮髯お虎婆鑛糞の西川と千三屋の石作まで、いちいち長屋中の挨拶に立廻りぬ、

『や、これは始めて御目にかゝりますが、御覽の通り不意に新參の厄介物が一人、どうか今後、よろしく願ひます、實は御一同を無理にも御招待申して御交際のため是非、どッか料理屋へと、氣の付かない事はありませンが、それぢやァ却ッて御迷惑と心得、わざと差控へて萬事後日の事と致し、兎も角このまゝで當分お仲間入を願ッて置きませう、ハ、、

まだ常に多く不在勝で、をり〳〵歸ッて來て、たまに寢るくらゐのこッてすから、猶さら以て御面倒でせうが、衣類調度その外の一切は他へ預けて置いて別段こゝへは何も持込みませンから、その點は御安心下さるやう念のため申上げて置きます、ハヽヽヽ』

さァます〳〵正體の分らぬ奴が舞込ンだり、相も變らぬ朝鮮鬚、まづ第一番に向側の千三屋へ這込ンで、これも同じ鰹型に出來たる例の石作と顏を見合すや否、

『いやはや大變な奴が舞込ンだぢやァありませンか、どうですい石作さン、何と鑑定しますな、卦の本道にかけては聊か覺束ないが多年の間、いろンな奴を相手にして人馴れた拙者、中らずと雖ども遠からず、大定それと人相風體で見當を付ますが、今度あの空家へ來た人間ばかりやァ、實に難題だ、いかにも分らないね、ざる蕎麥三個と正宗の二合瓶一本づゝは首尾よく胃袋に落著いたが、本人の正體どうも腑に落ちないよ、ハヽヽヽ』

『眞實だ、それに第一あの風俗は何ですい、え、初心でなし半可でなし、通でないは無論の事、

あッて身體に著飾れた調子でなし、一種奇態な著付け工合、嘔吐が出ますな、木綿でさへ無きやァ人間最上の綺羅と思ッてるンでせうが、や、實ァ可哀さうなもンだ、我々が昔の全盛を語ッて少しやァ世間體、恥といふ事を知らしてやりたいもンだ、加之も小癪に觸ッて堪らないのは初見の御挨拶さ、まだ卵子の殼を背負ッた青二歳奴が、てか〳〵と額を光らしやァがッて、迚も隱しきれない反ッ齒を上脣で無理に包みながら、交際のため御一同を料理屋へ呼ンで一獻さし上げたい、ハヽヽヽ、筈のところ却ッて御迷惑と差控へたは宜かッたね、わざ〳〵差控へずとも宜いこッた、また常に不在勝ですが衣類調度は他へ預けてあるから御安心下さいとは、凄まじさも峠を越して只もう恐れ入るの外なしだ、考へりやァ憎氣はないよ、ハヽヽヽしかし何でせうな』

『さ、そこだて、どうも拙者の鄰屋へは薄氣味の惡い妙な奴ばかり住込むよ、前の吉川といひ今度の彼奴といひ、もし石作さン、あれで夜の夜半に變な聲を出して小唄の一節も唸られちやァ、堪らないね、じッと寢て居られないね、それが原因で煩ひ付くだらう、ハヽヽハ』

折しも壁一重を隔てゝの聲は例の鑛糞、まだ九州の金山に芽を吹いた夢も見ね體なり、

『や、面白い談話ですな、しかし八卦屋さンも石作さンも、さう氣を揉ンで馬鹿々々しい議するほどのもンぢやないさ、あの正體は分ッてますよ』

『西川さン、どう分ッてますな』

『實ァ長屋中、いち〳〵挨拶に立廻ッた時、たゞ呆れて奴にばかり饒舌らしたから分らないのさ、ところを西川要五郎、すぐ切込ンでね、本人の身分を白狀させましたよ』

『そいつァ手柄だ、全體どういふ素性の何物ですな』

『俳優さ』

『俳優、いへさ演劇の舞臺で藝をする俳優ですかい、あれが』

『つまり場末の壯士芝居ですよ、その藝名は花野露雄と言ッてね、書生俳優の下廻りですよ、ちよいと筋の立ッた奴にコキ使はれて、化粧前の水を汲む南瓜野郎さ、ハヽヽヽ、雜用飯を喰ッて三階に轉がるから不在勝さ、新らしい下駄なンかァ、きッと小道具の盜みもンだぜ、あの風俗は衣裳方を誤魔化して出た奴に相違ないよ、しかし俳優と名が付きやァ不思議なもンで、あンな出來損ッた野郎でも守ッ子や裏店の小娘に當りが付いて、をり〳〵引ッ張込むために八卦屋さン、鄰屋の空屋を借りたかも知れないね、ハヽヽ』

『や、こいつァ堪らない、どうしたもンだらう、いよ〳〵煩ひ付くよ』

たゞ一口に飲ンで壯士俳優といひ書生演劇と唱へ來りしが、もはや今日は舊俳優に對する新俳優の名稱に叶うて、確實に一種の技藝を備へしのみか、時勢に伴ふ劇界の刷新は、彼よりも多く此一派に希望を屬せらるゝ折柄、劇そのものとしては前途ます〳〵發展の兆あり、俳優そのものとしては將來いよ〳〵大成の兆あれど、偖その下廻りの雜兵には言語道斷の南瓜野郎、箸にも棒にもかゝらぬ奴あり、

舊俳優は數代連綿たる素封家の如く、時流に後るゝ恐ありながら、固く城壁を設けて叨りに出入を許さざれど、新俳優は卒然として起りし一代の富豪に等しく、門戸を開放して入り易きがため、風に連れ潮に從うて流れ込む魚類中には、頭も尻ッ尾も鰭もない奴、お玉杓子は蛙になれど、かういふ奴は到底、都の俎に上るべき善なく、田舍茶屋の汁の實にもならぬ奴なり、

されど本人また殊勝に自己を知るの明ありて、天晴れ腕を鳴して劇界の大立物となる野心もなく、たゞ俳優といふ名目が嬉しさの餘りに飛込ンだ奴、その根を洗へば十中の八九、理髪店の下剃でも氣が利かず、活版屋の職工でも世に出られず、眞面目な商家には猶更ら勤まらず會社員となるには信用もなく保證人もなし俥を曳くには脚が弱し、土方するには力がなし、新聞配達は骨が折れて嫌なり、牛乳配達は朝が早くて辛し、世話する人はあれど露店を張るほどの魂氣なく、鞭韃する人はあれど苦學するほどの勇氣なく、親兄弟に見放され親類縁者に突出され、進退こゞに谷まりて喰ふに喰はれぬ苦しまぎれ、るくでもない面を磨いて浮世の役にも立たぬ小器用を自己まづ惚込ンでの業、第一の目的は女に近づき得らるゝといふ淺ましさ、生涯そのまゝ舞臺の役は付かずとも、人しれぬ内々の稼ぎは浮氣女を釣寄せて男地獄となれば本人こゞに大願成就、もはや人間萬事この外の希望なしといふ奴なり、

その男地獄を我身の大願成就としながら、いかな浮氣の下司女さへ流石に恐れて逃出せばあはれや三年以來、いまだ曾て一人も釣寄せられしものもない色男、そも〳〵八軒長屋へ舞込ンで巣を構へしには何の神算鬼謀あッてか、戸籍面に本名ある筈なれど藝名は花野露雄、一種異樣の態度に黄色の聲を放ッて長屋中を驚かしぬ、

わけて鄰屋の朝鮮髯、壁一重に馴々しく聲をかけられぬ、

『お鄰屋、居らッしやるかな』

『居りますがね、少々、今日は氣分が悪くッていけませンよ』

『御病氣ですか、そりやァお困りだ、どういふ工合に悪いンです、實ア醫者の玄關に居ッた事もありますよ、ちよいと診てあげませう』

『いえ何それに、及びませンよ、時に貴君ア、俳優ださうですね』

『ハ、、、あまり好まないンですがね、素人には惜しいとか勿體ないとか何とか無理無體に引ッ込まれて、已むを得ずね、當時まア遊び半分の洒落ですが、出る毎に役が付くので困りますよ、この分ぢや迚も急に遁出せますまいよ、ハ、、、』

朝鮮髯その儘恐れて、ぐうともいはず、すうともいはず、息を殺して片隅へ縮みあがりぬ、

苟くも身を劇界に置いて、美の上に活動すべき俳優を業とし、その名は花野露雄、今年こよに二十四の色白といへば、まさか世間の想像これほどの奴とは思はねど、實は世にも人にも捨てられて自己一身の置どろもない無宿が、幸ひ野倒死の不運を免がれて區役所の借埋葬にも逢はず、ろくでもない生面の雜作を摺磨いて恥を恥と思はねば恥かいたる凡例なく、第一の目的は女に近づいて男地獄となれば生涯の大願成就、もはや他に希望なしといふ淺ましい奴、これまで演ぜし第一の技藝は山國の田舍芝居を打廻りし時、無言のまゝ花道より立出でゝ舞臺の上手へ啞の如く這入りし巡査が三年以來の大役、この東京では見物に對うて面出す事を無期限に禁じられ、たゞ樂屋で中俳優のため化粧前の水汲と共同の小使にコキ使はるるばかりの奴、あけても暮れても他の殘物を喰ひ錢の出ぬ酒を飲みたがり、動もすれば内々そッと衣裳を著倒して白晝の下に業を曝し歩き、障さへあれば小道具の煙草まで盜んで獅子ッ鼻の洞穴より吹出しながら、薄ッぺらの上唇に反ッ齒を押包ンで狒々の如き笑ひ聲、天生の顔と藝とに我身を攻められて今更ら退くに退かれぬとは、此奴いよ〳〵生して置いて此まゝ濟度の出來ぬ奴なり、

この難物が八軒長屋の入口に巣を構へて、案に違はず最初の衣類とは一切がらりと變りし風俗、油壺より引摺出せしかと思はるゝ綿風通の古袷一枚、元來これが自己の持衣裳に一種の

悪臭を放ち、いかなる狂言の使ひ捨を貰ひ受けしか、更紗形の二重に足らぬ木綿帯を左の横合に寛く結ンで、をり〳〵歸るばかりと吐した奴が此ごろの朝夕てか〳〵と面のみ光らして絶えず表障子の破れ穴より差覗きながら、檻に投込まれし色狂氣の如く、人の跫音さへすれば俄に呼止めて氣恥かしくも無く、どこの娘に追廻されたの、いや彼處の後家が蒼蠅いのと、的もない女沙汰に自己ばかりの一人決定これが此奴の疾病なり、

いかな化物が舞込むとも、實は負けず劣らず友喰ひの八軒長屋、容易に驚かぬ筈ながら、此奴ばかりには一蓮托生いづれも聊か惱まされて、壁一重鄰屋の朝鮮髯は固より向ふ二軒の石作も西川も果は恐れて近寄り得ず、彼お虎婆さへ呆れ返ッて皺面を反けながら、うか〳〵相手になれないと持餘すほどの體、たゞ例の熊公のみは朝早く飛出して夜遅く歸るがため、まだ此奴の毒氣にも中られず、幸ひ無事に笑ッて相變らずの氣焔萬丈、

『何のこッたい、つまらねエ、長屋中の估券が下るぜ、あンな青二歳に好きな熱を吹かして堪るけエ、あすの朝の出がけに乃公が一番、やッつけてくれべい』

『おッ近ごろ來なすッた俳優さンへ、もう起きなすッたかね、一軒置いて鄰屋の熊といふ辻待の轅棒野郎でさア、ちよいと今朝ア急がねエからな、出がけに色男の御面相、とッくり見直してエと思ッてるンだ、ついでに世間の娘ッ子や後家や騒がれるといふ迷惑筋の恐悚談語でも聞きてエもンだ、この面で四十二の厄年と來ちやア人間萬事、塞翁の馬の糞も拾へねエからね、せめて他の色戀で氣を晴してエよ、ハヽヽヽ』

例の熊さン例の一本調子に大聲あげて喚き立つれば、長屋中いづれも耳を欹てゝ、こいつ面白いと手を打鳴す中に、わけて鄰屋の朝鮮髯、ぬッと痩けこたる面を差出しながら額越の小

聲、

『大將、たのむぜ、長屋中の人助けだ、この化物が引ッ越して以來、何だか妙に氣分が悪くッて堪らないよ、二度と再び毒氣を吹出さないやう、ぎゆうと咽喉ッ首を占めて貰ひたい、しかし熊さン、よほど手嚴しく遣らないと通じないぜ、石佛の胸倉だからね』

『宜いよ、默ッてろい』

『名は花野露雄といふンだよ』

『うるせエな、默ッてろッてば』

この長屋中に雨戸一枚もなければ、たゞ表障子一重の外に熊公いよ〳〵勢ひ込ンでの大聲を張上げぬ、

『おい俳優さン、何とか言ッたね、むゝ花だ、花野だ、花野さン、もう夙ッくに九時を過ぎたぜ、どンな花でも露の持てねエ、時刻だよ、起きなせエ、用が無くッても一蓮托生の長屋だァ近所合壁の手前といふものがあらァね』

いかな癡恍助も九尺一間の塒、加之も障子越の外より吐鳴付けられて、はッと驚き、ぴよこりと鎌首を持上げながら、手を伸して表障子を引開けし花野露雄、いつの間に運び込みしやら、見れば追込場の破座蒲團三枚を置竝べて下に敷き、これも同じ穴より引摺出せし赤毛布の色褪めし一枚を上に被り、例の垢染みし綿風通の古袷を丁寧に疊ンで枕頭へ差置きつゝ、自己は丸裸に越中褌のまゝ狼狽へて這出でし體、嘘にも俳優と稱して此奴が女の事を兎や角いふかと思へば、流石の熊さンも呆れて暫し無言に打守りぬ、

されど本人どこまでも天晴れ花形俳優の心意氣、加之も女沙汰に追廻されて今この長屋に身を忍ぶといふ體、せめて顏色でも黑ければ目にも立つまじきに、血の氣もない眞ッ白の面を

摺磨いて、いよ〳〵猿眼と獅子ッ鼻と狐面の反ッ歯に見苦しく際立ちし奴、熊公の顔を見る。

や否、吐す事が猶更罪の深い奴なり、

やァ寢過ぎた、うッかり寢過ぎて仕舞ッた、よほど起された工合ですな、ハヽ、實は前夜、ちよいと出ると運わるくね、久しく遁げて居た女に取ッ捉まッてさ、それがため心にもない疲勞で、やう〳〵一時過に生命からゞ〳〵切拔けたといふ始末、ハヽヽヽ、さァ這入ッて下さいよ、きけば何ですッてね、俥を曳いてなさるさうだが、これ幸ひだ、をり〳〵乘りませう、なァに私の行く先が先だからね隨分、爲になるさ、辻待の拾ひ客で一日の汗水になるよりやァ、骨が折れなくッて實入が宜い筈だ、ハヽヽヽ』

脚下より唐突の不意打を喰ひし熊公、あまりの癇癪玉に物もえいはず、たゞ目ばかり剝いて泡を吹きぬ、

『こン畜生、こン畜生』

色狂者の青二歳と高を括ッて寢込を押へ込み、この馬の脚めと思ひの外、自己が脚下より反對の不意打を喰ひし熊公、をり〳〵俥にも乘ッてやらうといはれて猶更の癇癪玉、むら〳〵と腦天まで突上げね、

『やい〳〵やい、ふざけるな此へッぽこ野郎め、さァ乃公ァ承知しても料簡の蟲が治まらねエぞ、うねァ全體この長屋へ何のために舞込ンで來やァがッた、二錢五厘づょの日掛で月に七十五錢を出しやァ大屋の手前、どンな奴が來たッテ差支なからうが一棟の軒を竝べた近處合壁、一蓮托生の長屋にやァ自然に長屋の作法といふものがあるンだ、も一度その反ッ歯から今の音を吹いて見ろ、何だと、久しぶりの女に取ッ捉ッた前夜氣の疲勞で今朝ァ寢過した、よく起きて坐ッて目を開いて滿足に吐したよ、いくら無面目に生づう〳〵しくッても

人間の皮ァ被ッてる以上、腹の底で少しやァ氣恥かしいと思はねエか、えエおい、また幸ひ俥にも乘ッてやるたァ、いつ乃公が頼ンだい、ほろ俥に犬猫の死骸を乘ッけてもな、まだ、浮世の罪が淺くッて四十二の厄年まで無事に來た熊さンだ、汝のやうな色狂者の猿ものを曳いて歩くほどの耄碌ァ仕ねエぞ、しよびき出して張くじく奴だが、それも面倒だから申し聞けるンだ、以後一切二度と再び色の女のと小いやらしい事を吐して見ろ、全體また女護が島へ吹流されたに仕ろ、ろくでもねエその洒ッ面で、第一その氣觸な天生でさ、ハハ、、よせよ、つまらねエ、無效だぜ、も少し人體に相應した謀反氣を出すもンだ、そも俳優になるからして物が間違ッてらァ、あンまり緣が遠過ぎて疑はしいよ、眞實に汝、俳優かね、錢を取ッた見物の前で舞臺の藝をする俳優かね』

奈何せン女の事實に付いては悲しや由來こよに未だ曾て一人の證據も出し兼ねれど、俳優かと念を押されしが花野露雄その身に取ッて生涯の無念この上もない顏色、じろりと額越に睨みあげて身を斜めに構へながら、變な調子に兩の拳を握り詰めし體、なるほど流石に何處やら演劇らしく、加之も言葉まで俄に白めいたり、

『や、なよ何といふ、鑑札ァ生憎く先生の手許にあッて今こよでの證據もなけれど、この花〻野露雄が俳優でなくば其他に何と見える』

鑑札よりも時に取ッての現在、爭へぬ伎藝の上に示したる筈なれど、もはや言ふだけ言うて溜飲を下げし熊さン、平氣の鼻唄に冷かしながら、せさら笑ひぬ、

『まァ宜いや、ね、ぢやァ俳優として置かうよ、ハ、、、しかし俳優さン、いくら狂言でも何でも物には程度のあるもンだ、のべつ幕なしに人の面ァ見て方圖のねェ色戀の狂氣沙汰ァ止して貰はうぜ、この長屋ァ汝一人が借切ッたンでもあるめエからな、おとなしく仕な

せエ、あたり近處が迷惑た、汝に好きな熱を吹かれちやア、長屋中に住ンでるもンの總齒が一時に浮き出さアね、ハ、、、、おい鄰屋の八卦屋、向ふの千三屋に九州の金山さン、みンな安心するが宜いぜ、今この俳優に乃公が委しく組合の規則を言ッて聞かしたからね、ハ、、、、』

きくや否、いづれも一時に面を出して、笑ひながら手を拍ち叩きぬ、

『御苦勞々々々、それで助かッたよ、もう毒氣に中られる恐れは無からう、長屋の天下泰平だ、ハ、、、』

されど花野露雄が心中なか〳〵泰平無事でなし、おのれ今に見よ、目の覺めるやうな女を引摺込ンで此奴等の膽魂を抉ッてくれンとの覺悟なり、

例の熊公がために的なしの色狂者と吐鳴付けられ、その面で俳優かと念を押され、長屋中より手を拍ッて笑はれし花野露雄、人間第一の目的を女とする身に取ッては生涯の無念、この上もない恥辱、おのれ今に見よとの一心さても怖ろしや、此奴そも〳〵どこで如何なる女を探し當てゝ引摺込みしか、夜更け人定りし後、壁一重の朝鮮髯が寢耳へ洩れ來る癡話口說、加之も不思議に女は死の生るのといふ半泣の體なり、

不意に夜半の夢を破られし朝鮮髯、はッと驚いて鎌首を擡げながら、耳を欹つれば女の泣聲いよ〳〵激しく、今しも男の胸倉へ武者振付いたるか如し、

『口惜しいッ』

『おい、おい、さう手荒な事をゝ、のゝ喉咽が、あゝ苦しい、お放しよ、放せッてば』

『いゝえ妾、放しませンよ、これほどに思ッてる妾を、こゝまで妾に苦勞さして貴君ア、そ

れで濟むンですか、さァ花野さン、どういふ理由で妾を欺して、こンなところへ遁込ンだンです、そりやァ貴君のこッてすから、いくらでも外に蠅蒼いほど女は出來ませうが、妾こそ貴君のため親にも兄弟にも捨られて仕舞ッて、世間の人へ顔が合されないンですからね、かうして貴君を見付出した以上、もう死ンでも宜いの、しかし一人では死ませンよ、前世の約束だと諦めて下さい』

『まァ、放せよ、兎も角こゝを、おい、放せといふに』

『放しますから、貴君、きッと、妾の、妾の今、言ッた事を』

『きくよ、きくよ』

『さァ放しましたよ、さァ貴君、どうして下さる』

『だがね、さう人間の生命を、さう安くさ、つまらないぢやァないか』

『なァに安くッても高くッても構ひませンの、かうなれば、妾どうせ夢中ですからね』

『いくら其方が夢中でも、まだ浮世に用のある此方は少々、恐れるよ』

『おや、また、貴君、そンな事を、現在、今、きッと妾のいふ事を聞くと、言ッたぢやありませンか、全體この夢中に讎が仕たンです、どこの誰がため妾、こゝまで夢中になッたンです、事の源因は貴君ですよ、思ひ込まれた因果で仕方がないと諦らめて、花野さン、お氣の毒ですが覺悟して下さい、妾のやうなもンと心中するのは、定めて嫌でせうが、これまで貴君、何十人といふ世間の女を、さンざ迷はして來た應報ですよ』

『や、さう、いはれて見ると一言もないがね、可哀さうに今年まだ二十四だよ、和女だッて二十五で、やう〳〵蕾が開いたばかりの花ぢやァないか』

『あれ、妙に今更、あらためて年齢の事を言出しなさるのね、なるほど妾は二十五ですよ、

貴君ア二十四で、男より女の方が一歳の上だから、それが不足ですの、それがため貴君、妾と心中が出來ないンですか』

『いゝやさ、困るなァ』

『どうせ貴君、お困りでせうさ、しかし花野さン、自業自得で、女に生命がけて惚込まれるやうに出來たのが貴君の不運ですよ』

『いよ〳〵困るなァ、どうしたら可からう、退くにやァ退かれずさ』

壁一重を隔てゝ耳を欹てながら、始終の樣子を聞取りし朝鮮鶏もはや堪らず、がた〳〵打顫ふ手足に力を込めて息を殺しつゝそッと其まゝ這出しぬ、

長屋中、まだ寢ぬ宵のうちこそ豆ランプの灯影は射せど、いざ寢入れば何處に一點の火の氣もない眞ッ暗闇、加之も雨戸はなし表障子一枚づゝの軒竝びに例の朝鮮鶏、そッと自己が塒を脱出しつゝ鄰屋の熊公が枕頭へ這込むや否、聲を潛めて搖起しぬ』

『たゝ大變だ、大變だ熊さン大變だ』

終日の疲勞に前後も知らず寢入りし熊公、はッと飛上りぬ、

『何だ、何だ火事だ、どこだ』

『火事ぢやないよ、熊さン、大變々々〳〵心中だ、長屋に心中が出來たよ』

『えッ、心中、誰だ』

女房お芍も目を覺しながら、相手が相手と高を括ッて落著いたる體、

『良人さン、さう慌てなくッても八卦よい屋だよ、何だッて今ごろ人を、馬鹿々々しい、夢でも見損ッて戸まどひ仕に來たンだらう、氣の付くやうに腦天の一打も喰はしておやりよ』

『やッ、危い、熊さン、むやみに遣ッちやァ困るよ氣は確かだ、眞實だ、心中だ、細君、夢、

でも嘘でもない現在、鄰屋だ、鄰屋の俳優だ、いよ〳〵今、やるらしいぜ』

『何、俳優、あの色狂氣ぢやァねェか、それこそ寢恍けて囈言を叱してるンだらう、なァ嘴ァ』

『さうだよ、あンな氣觸な奴に心中の相手が出來て堪るもンかね』

『ところが、おうでないよ、正しく心中の相手になる女があるから不思議だ、さも口惜しさうな半泣で野郎の胸倉へ武者振付いてね、さンざ癡話口說の果が大變、いよ〳〵心中といふ間際まで押詰めたンだ、加之も始終の成行を委しう壁越で、手に取るやうに聞いて來たンだから熊さン確實だよ、いくら何でも捨てちやァ置けないさ、第一この幸運齋、薄ッ氣味が惡くッて居堪らないよ、早く熊さン、はやく早く、あンな奴でも人間一疋の生命だ、いや二疋だ兎も角、まッ闇ぢやァ仕方がない細君、マッチ〳〵』

あまりの事に今は夫婦も驚いて、マッチの火を豆ランプに點せば、痩こけた額に冷汗を流して顏色まで變へし朝鮮髯、

『たのむよ熊さン、早くさ』

『ぢやァ眞實だね』

『眞實でなくッてさ、わざ〳〵誰が夜の夜半に慌てゝ來るもンかね』

『むゝ待てよ、こいつァ少々、乃公も何だか薄ッ氣味が善くないぜ、現に一昨日あゝいふ工合にコキ卸してやッたンだからな、その面當半分に女を引摺込ンで、もし無理心中でも、やゝどッこい、考へもンだ、うか〳〵飛出せねエよ』

『良人さン、關係が面倒だから、默ッて出ない方が宜いよ、あゝいふ奴は得て死際の惡いもンだからね、苦しまぎれに轉輾うち廻ッて、どンな事をするかも知れないさ、全體この八

卦屋も、八卦屋だ、ろくな事を持込ンで來ないよ、いくら何と言ッても良人は出さないンだからね、もし近處合壁の義理なら壁一重鄰屋で流れ込ンだ血糊にでも踏込ッてから吐鳴出すが宜い、それまでは知らないよ、薄情なやうでも良人は今年四十二の厄だよ、さア八卦屋さン出て往ッて貰はう』

朝鮮髯、ごそ〳〵と片隅へ這込みぬ、

『熊さン後生だ、こゝに暫時このまゝ置いて貰ひたい』

壁一重の心中沙汰に驚いて熊公の枕頭へ遁込みし朝鮮髯、其まゝ顏色を變へて片隅に身を縮めしが、ぽッと白く夜の明けかゝるや否、此奴また俄に痩ッ首を振立てゝ騷ぎ出しぬ、

『さア熊さン、夜が明けたよ、あのまゝ捨てゝも置けまいぜ』

『まア兎も角、見屆けて來るが宜いぢやアねエか』

『さ、その見屆けるに付いてもだ、どうも一人ぢやア面白くないよ、もう大夫丈、同伴に出て貰ひたい』

『大丈夫なら一人で行けるだらう、乃公だッて人間の生命に關ると聞いちやア、なアに嚊アが止めたぐれエで止まる男でもなしよ、また例の罵倒があるにしろ、なアに汝、そンな事で二の足を踏む熊さンでもねエがね、どういふもンか不思議に彼奴ばかりやア薄ッ氣味が惡くッて飛出す勢ひが出なかッたよ、その野郎が變な工合で、女を相手に死ンだ容態ア猶更御免を蒙りてエな、まア長屋の總出になるまで差控へだ』

『困るよ、この長屋で熊さンが、それぢやア困るよ』

『困ッても乃公ア嫌だ、生きて居てせエ何だか妙に蟲の好かねエ奴だからな』

『や、仕方がない、壁一重に鄰り合ッた因果だ、向ふの千三か鑛糞でも引ッ張出してやらう』

夜の明けしを何よりの力に、まづ石作か西川を叩き起さんと、向ふの右側に添ふを立出でしが、刃物三昧としては血腥い悪臭もせず、ぶら〳〵首でも吊ッたとすれば、わづか疊三枚の九尺一間に男女の死骸、表障子に當るか觸るかと思ひの外、その影もなし、さては手を引いて飛出し闇に紛れて大川へでも身を投げしかと、あまりの音なき體に朝鮮髯そろ〳〵立寄りながら、そッと差覗けば、野郎二人、前後も知らず大の字形に睡りぬ、朝鮮髯、あッと呆れて、また熊公の許へ馳込むや否、

『熊さん〳〵』

『どど何うだ、やッてるかい』

『やッたも、やらないも、まァ熊さん、ちよいと往ッて見るが宜い』

『だからよ、なぜ千三か鑛糞を叩き起さねエンだ』

『いやさ、それに及ばないよ、もう拙者一人で確乎だ、畜生、人を馬鹿に仕やァがッて、さァ此まゝぢやァ置かないぞ、誰が何と言ッても幸運齋が承知しない、さァ承知しないぞ』

『全體どう仕たンだい、急に目を剝いて跳ッ返へるぢやァねエか』

『跳ッ返へらずに治ッちやァ居られないンだ、女と思ッた相手が熊さン、野郎さ、畜生、加之も心中どころか枕を竝べて好い心持に寢て居やァがるンだ、つまり同じ穴から女形の薄ッ〃層でも引ッ張ッて來て壁越の一狂言、うまく欺しやァがッたンだよ、夜の明けないうちに相手の奴を追歸した後で、や、前夜は實に、とか何とか吐す筈が、ハ、、、狸め、勞れて寢過ぎた正體に相違なしの中央だ、熊さン、どうしてやらう、腹が立ッて堪らない、生れて以來こンな癪に觸ッた事アないンだ、だしぬけに水でもぶッかけてやりたいよ』

流石の熊公夫婦も目と口と開いたまゝ、笑ひもえせず怒りもえせず、ほッと曉方の呆れ顔、舐

められたるが如し、

その愚には及ぶべからざる世の諺、こゝまで白癡の骨頂を盡しても、さて女といふものゝ片相手に見られたいか、的なしの色狂氣といはれし口惜しまぎれに、同じ恥しらずの穴より女方の藉ッ屑を引連來りて、壁越の一狂言に心中沙汰の癡話口說、まンまと首尾よく鄰屋の朝鮮髯を驚かせしが、思はず勞れて其まゝ寢込みし花野露雄、ふと目を覺せば既に夜が明けたり、

『おい、おい〳〵大變だ、夜が明けたぜ、今のうちだ、そッと、早くよ靜かに、そッと〳〵』

『や、南無三だ、寢過したぞ』

『心中しに來た女が、さう寢過しちやァ困るよ、長屋の奴等に目ッけられないうち、さァ早く、いづれ今夜、此方から出かけよ』

『待ッてるぜ、しかし前夜の役ァ少々、骨が折れたよ、いくら安くッても天ぢン一杯、確實だらうな』

『奢るよ、きッと奢るから早く、油斷大敵だ』

『おッと承知、よし來た』

いづれ此奴の片相手に呼ばれて來るほどの奴、こそりと立出でゝ鼬の如く前後を見廻しながら、足音を忍ばせつゝ今しも長屋の入口を飛出さンとするや否、外に待受けし朝鮮髯、ぬッと不意に現はれて其奴の胸倉へ喰ひ付きぬ、

『さァこの野郎、よくも人を馬鹿に仕やァがッた』

『こりやァ失敬な、何が人を、全體どうするンです』

『どうも斯うもあるか、心中するなら仕て見ろ、無事は歸さないぞ、今度ァ長屋中あらためて總見物だ』

『えッ』

『やァ熊さん、此奴だ〳〵』

聲に應じて飛出せし熊公、朝鮮髯に代ッて其奴の胸倉を摑みながら、ずる〳〵と長屋のうちへ引摺込みぬ、

『はゝァこの狸だな、夜の夜半に女の聲色なンか使やァがッたのは、道理で人間の面ァ仕て居ねエが、ふざけた眞似をする奴だ、やい、よく聞けエ、うぬ等の狂言に乘ッて手盛を食ふ長屋ぢやァねエぞ、さァ覺悟しろ、あの色狂者と一個に縛ッて大川へ叩ッ込むから』

『まゝ眞ッ平、御免ください、決して、さういふ理由では、たゞ頼まれましたので、いや實は下稽古の相手になッたばかりですから』

『何、何だ、稽古だァ、べらぼうめ、いくら白晝の舞臺に出られねエ奴でも、人の寢靜ッた夜の夜半に心中の稽古する奴があるけエ』

怨恨骨髓に徹せし朝鮮髯、こゝぞと一所懸命の聲を張上げて叫びぬ、

『大變だ〳〵、心中だ〳〵』

出るにも出られぬ花野露雄、九尺一間の一方口に遁場もなく、破疊三枚の上に身の置きどころもなく、ぐる〳〵と這廻りし果は片隅の吊戸棚に搔上ッて、猿の如く面のみ差出しながら戸外の樣子を窺ひぬ、

一合の外に二合の酒も水も盛れず、人間相應に白癡を盡せし花野露雄が心中沙汰は、その曉

に長屋中の嘲笑となりて、三尺の吊戸棚より引摺下されし上、いよ〳〵一札の謝罪證文を差出しぬ、

加之も文句の指圖役は前夜以來の本氣に怒り出して今朝まだ笑顔を見せぬ朝鮮人、今更面目次第もない頭と共に書手は本人の色狂者、その一札を確と請取り正に預かり置くものは無筆の熊公なり、

あやまり入候一札

私事身分の程も顧みずお長屋の諸君方に對してガラにも無之色男となりたき一心より不圖惡心增長致し内々同類の怪しき者を語らひ候上不心得千萬にも深夜男女の聲色を使ひサンザ癡話口說の段取を聞えさせ全く心中でも致し候やうにケシカラン眞似を仕り候處其曉方に露顯致し候事其罪甚だ以て輕からざる義と申譯なき次第重々奉恐入候

就ては今後一切かやうの馬鹿らしき失態は決して致すまじく且又いかなる場合に立至り候共ウツカリ女の事は口より出すまじく寢言にも申すまじく候間何卒特別の義を以て今度の一條大目に御見遁し被下度奉願上候故あやまり證文一札爲後日仍而如件

恐惶謹言頓首再拜伏て申上候事也以上

別而お鄰屋の幸運齋先生樣に對し奉つりて頗る甚だ以て此上もなく恐縮千萬至極に奉存候事也

長屋中諸君樣方御中

花野の露雄

この八軒長屋の寶物ともなるべき天晴れ名文の謝罪狀一通、熊公の手に納りて後は、流石の

色狂者も聊か熱の冷めし體、さらぬも元來の小男いよ〳〵小さくなりて身を縮めながら、其まゝ恥を忍ンで飛出しもえせぬは、よく〳〵この長屋の外に身の置どころもない奴、もはや劇場の火の番にも使はれね俳優殿なり、

それに引代へて例の朝鮮髯は滿面の得意、ぐッと一時に溜飲を下げし心地、なけ無しの鼻を高くしながら、痩こけたる肩を怒らして饒舌立てぬ、

『どうですい石作さン、あの謝罪證文あれで宜うがせうね、文言に就いて彼是ないでせうな、ハヽヽヽ』

『いや、うまいもンだ、實に感心しましたよ、流石ア君だ、ね、平生は別段これといふ目立ッた事もないやうだが、偖、あゝいふ場合に立至ると長屋中、あれだけの文句を何の苦もなく、すら〳〵と出すものァ無いよ』

『ハヽヽヽ色狂者、ぎゆうの音も出ないところが呵しいよ、なァに石作さン、まだ文言は幾何もあるがね、まづ事の分るのが專一だから、あの邊に仕て置いたのさ、加之も一行の中で半分も字を知らないといふ厄介な奴だから、いち〳〵手を取らンばかりに教へてやッた面倒さ、實に閉口したね、馬鹿々々しい、夜半の壁越に驚かされて曉方の謝罪證文まで教へて遣りやァ澤山だ、ハヽヽヽ』

『何かの因緣だらう』

『まッ平だ、あンな奴に何かの因緣を繫がれて堪るもンか、時に石作さン、いつの間にか十月も過ぎて仕舞ッて、もうこれ霜月だ、いよ〳〵來月は師走ですぜ、ぼンやり仕て居れないよ』

『眞實だ、どうせ世の中と同伴に歩けない覺悟で、いくら暢氣に構へ込ンでも年の瀨といふ奴

ア、ふしぎに人を騒がすもンだからな、うか〳〵油斷が出來ないよ、嘘は吐く是から餅を搗くばかり、といふ川柳は八卦屋さン、まだ浮世に希望のある人間だ、かうなッちやア、お互ひに借金方へ嘘を吐く苦勞もないが、あとで搗く餅の工面もないから痛ましいよねエ、ハヽヽヽ』

『や、しかし石作さン、まだ四十日の餘もあるから、日に一錢づゝの用意しても五十錢に近いよ、伸し餅の一枚ぐらゐ買へるだらうさ』

『その日に一錢づゝが大役だ、兎も角も何か喰ッて生伸びた上の一錢づゝだからな、覺束ないぜ』

『なるほど、うッかり仕たよ、喰ッて上の一錢だな、ハヽヽヽ』

定めなき世の中の總勘定、いづれ來るものと知りながら、さても一年中の大油斷こゝに押寄せ來りて、いよ〳〵免れぬ年の瀬の大晦日となれば、俄の脚下より立つ烏の羽音に驚いて落つる平家の昔に等しい大混亂、まさか首は取られまいといふ其首さへ、うか〳〵すれば取りに來る奴ありさうなり、

されど物の遣取は世間普通の事、この八軒長屋に一升の米も麥も貸すものなければ一日の味噌醬油も借るだけの力ある奴なく、結句の幸ひ寧ろ却ッて安樂の別世界と思ひの外、やはり貧乏神の際ゆく駒に驚かされて、あッと今更尻餅は搗けど、のし餅の一枚も買へぬ人間煩惱の四苦八苦に惱まされつゝ、ぎッしり首も廻らず手足も出せぬ九尺一間の塒に泣音を洩しぬ、

口は減らねども次第に年は增て行く浮世の業突張、お虎婆は櫨柑函を横に炭團一個の抱火鉢、

表障子の破れ目より吹込む寒風に、さらぬも皺くちやの滿面を皺めながら、誰にいふともない獨言、

『さア、いよ〳〵一年また御無事にお濟し遊ばしたよ、ちよッ、あすの朝ア六十六だ、生きて居たくもないが殺し手も無きやア首も吊れまいさ、おゝ寒い、いやに空ッ風ばかり吹ッ込むよ、畜生め今日ア世間で金の遣取する日だ、この風に一圓紙幣の一枚ぐらゐ舞込ンで來さうなもンだなア』

その鄰屋は廂髪の古巣まだ其まゝの空屋を置いて、三軒目は例の十千萬圓に浮かさるゝ西川要五郎、鷹が飛べば糞蠅も飛ぶ勢ひに空を睨ンで、相變らず九州の金山、さて久しいものなり、

『まづ面白くない今年も今日で最終だ、一陽來復、あらためて來年こそ、腕に糾をかけて金山を一番、どうか物に仕てくれやう、いつまで如斯ぢやア堪らない、なアに男ア裸一貫、覺悟次第で天にも上りやア地にも落ちるさ』

その鄰屋は千三屋の石作、あけても暮れても飛歩いた今年中の彼是は只こゝに飢死を免れしだけの事、されど此奴また此奴相應の野心滿々たり、

『考へて見ると乃公も隨分、なか〳〵と久しい間の御辛抱、思ひ切ッた落魄やうで、餅のない歳の暮が七年も打續いたから、もう宜からう、いかな執念深い貧乏神だッて少しやア魂氣が盡きたらうよ、そろ〳〵この石作に飽た筈だ、加之も物事は總て七年を浮沈の境界とするから、や、有難い、來る春は賴母しいぞ、遲くとも櫻の咲く頃までに此長屋を立退てどッか人間らしい市中で藏の一戸前もある家を當分まづ借屋でも堪忍するさ、其うちには居ぬきのまゝ買取ッて、あまり遠くもない格安の地面あれば遁さず、それも此方の物にし

て仕舞ッて、ハヽヽヽ驚くだらうよ、一二年の後には懐手のまゝ顋で物いふ地主様だ、その時こそ、この公乃を雲摑みの彼是屋だの、いや川底の千三屋だのと吐した奴への御面相が、今から眼に見えるやうだ、ハヽヽヽかう考へて見ると偖、よし工面が出來るに仕て も今年の餅を喰へないぞ、うか〳〵人にも貰へないよ、これで七年目の介拂ひだ』

その向ふ側は色狂者の狂言にも盡果てた花野露雄と八卦よい屋の幸運齋、まさか貸した金を取りに出かけたでもあるまいに、どうした事やら今日の大晦日に二軒うち揃うて朝よりの不在、その軒並びは例の熊公夫婦、こゝは一入また面白き浮世の御難場なり、

お虎婆も鑛糞も千三屋も色狂者も八卦よい屋も、皆これ丸尺一間に膝小僧抱猴の境涯、たとひ天井を仰いで笑へばとて縁の下に伏して泣けばとて、自己たゝ一人の顏藝で濟む筈、生きても死んでも浮世の差引さらに何の損益なし、

されど例の熊公のみは幸か不幸か破鍋に閉蓋の縁あッて、浮ぶも沈むも今更捨てられぬ女房持の身體、さうは仕て居れぬ今年の大晦日ながら、どうも出來ぬ今日の切迫に自棄の大の字形、

『おい嚊ア、仕方がねエ、潔よく諦めろい、今さら惡びれたッて同じこッた、折角こゝまで深い馴染を重ねて來た貧乏神だよ、いくら夫婦が喧嘩腰になッて叩き出す氣でも、先様は御承知なさらねエ、さう急に出て往ッてくれねエからな、いッそ此まゝ相變らず交情よく住て、貧乏神と同棲に年を送らうぢやアねエか、

『何だねエ、まだ良人さん、そンな氣樂な事を言ッてるよ、今日は大晦日だにさ、あすは元日だよ』

『ふしぎはねエさ、月日は正直よ、いづこの里も世間一體だ、しかし遣取の面倒がねエだけ

汝、有難く出來てるンだぜ、えゝおい、千兩の金を睨ンで腕を組ンだり首を捻ッたり仕てさ、帶に短し襷に長エ苦勞をするよりやア、いくら幸福か知れねエぜ、世の中には一萬圓の金を脚下に積ンで首を吊る奴のあるのも今日だ、有難エありがてエ』

『だッて良人さン、いくら何でも一年の最終だよ、來年の浮世最始だよ、せめて、のし餅の一枚ぐらゐ、どうか仕たいさねエ同じ人間だから』

『愚癡ッぽく吼えるない、きのふ稼いで來た錢があるぢやァねエか、まだ米の一升や一升五合は買へる筈だ、大晦日だッて元日だッて生命に別條が無きやア人間この世の恥辱も外聞もねエぞ、伸し餅一枚が來年中の飯の代物になるけエ、もし一年一枚で濟むなら三年ぶち込まれる覺悟で今夜、七八枚も盗ンで來てやらア、どうだい、左衞門の尉』

『困るねエ、良人さンは、うか〳〵物も言へないよ、直接それだから』

『だッて、さうぢやァねエか、乃公ア汝か十年も氣樂に暮せる事がありやア、三四年ぐれエ牢に叩ッ込まれても宜いンだからな』

金殿玉樓に鬼の棲む世の中、この九尺一間の破疊に自然の佛あり、嚙ンで吐出すやうに荒々しく喚き立つれど、いふにいはれぬ優しき一言に女房お菊、おもはず顏を反けながら、肌寒き古袷一枚の袖に涙の露、そッと押拭ひぬ、

『ねエ良人さン、なるほど、お米は二升足らず、あれで買へるからね、それを一升に仕て、あとの一升分で、お酒でも買ッて來ませうかね』

『やい〳〵、默ッてろい、現に今うぬが吼面かいた其、その餅せエ買ッて遣れねエ今日の乃公が酒を、こン畜生、なゝ何を吐しやアがるンだ、はッ飛すぞ』

『でもさ、妾、つまらない愚癡を言ッて惡かッたからさ』

『まだ吐しやアがるな、さア承知しねエぞ、よし、さう吐しやア乃公も意地だ、今に見やアがれ』

『あれ、良人さン、どうするンだよ』

『べらぼうめ、今夜ア世間も徹夜だ、これから氣を變へて稼ぎに出るンだい、伸し餅一枚と酒を五合、うぬッ持ッて歸るぞ』

あッて足らぬ浮世の有財餓鬼よりも、無うて足る事を知る今日の我こそと、熊さン大に一種の人生觀より樂天主義を唱へて、其まゝ悠々と九尺一間の塒に横はりしが、二升の米代を割いて酒を買はンといひし女房の一言に、むくりと跳起きつゝ鬼のやうなる目に涙、伸し餅一枚のため凍えし轅棒を握ッて、あはれや年の暮の北風に吹かれながら、ほろ伸を曳出しぬ、

出て見ればなるほど浮世なりけり、うか〳〵と暮せし一年中の總仕舞、けふ一日は獺も杓子も飛出して狼狽へ騷ぎつゝ、遣るか取るかの境を東西南北に跳逆ふ體、往來は火事場の如く人は織るが如く、中には血眼に敵を覘うて、駈行く奴あり、一方の血路を開いて遁廻る奴あり、ぼンやりと氣抜して的なき方角へ歩む奴あり、其まゝ夜遁も仕かねまじき思案に立停る奴あり、止手さへ無くば今夜の捨鐘を相圖に生命の危ふき奴あり、いづれ三百六十五日の帳尻に仔細のある奴、仔細なくて來る春を遲しといふ奴は、世の中に用のない馬鹿か拔目のない才物か今更の金錢に關せぬ富貴名門か進退こゝに谷りし自棄貧乏か隱居の爺か婆か無邪氣なる小兒の外は、人間一切たどこれ金のために魂魄脱殼の操り人形となりぬ、

されば熊さン、いつにない案外の客を拾うて、晝過より夕暮までに思ひもよらぬ七十六錢とは近來の大猟、や、こいつ面白いぞ、持つべきものは嚊ア大明神、よくも愚癡を溢してくれ

たと、ます〳〵勢ひに乗じて脛を飛しつゝ、もはや伸し餅一枚では承知せぬ體、夜の明けるまでは稼ぎぬく體、この寒中に大汗を流しながら、働けば働くほど不思議に絶えず取ッて、その夜の十一時ごろは一圓六十八錢となりぬ、

五圓紙幣を正直の頭に戴いて以來、一圓六十八錢は今日が始めての熊公、徹夜の大喧日を幸ひ今一息で何の苦もなく二圓と思ひしが、宿には伸し餅たッた一枚を今年の願望に我を待つ嚊アの心、あの古袷を素肌に著せて置いても、偖それには不足もいはぬ女と、俄に轅棒を引房しぬ

空俥に大願成就の伸し餅二枚と生涯のうちに一度は苦い茶で甘納豆を飽きるほど食ッて見たいと吐した嬶アの熱心、先甘納豆半斤に三十日の茶を四半斤、別に鹽鮭二片の皮包を轅棒に吊しながら、居酒屋の門口に咽喉は鳴れど、まづ本城へ落著いて御臺所を相手の年忘れ、

ゆる〳〵大胡坐のまゝ春を迎へンと、兩國の河岸傳ひに厩橋の此方まで來かゝりし頃、淺草より除夜の鐘を撞出しぬ、

流石に市中とは違うて一軒の小商人もない片側町、兩國より厩橋までの河岸傳では夜半の鐘もろとも猶更人の足音なく、たゞ大川を舐めて吹き來く筑波颪の北風、ぞッと身に沁む寒さに思はず首を縮めて前後を見返れば、ちら〳〵橋の上を往來ふ提灯の灯影、まッ黑の闇水にうづりて火箭を射るが如く物凄し、

折しも河岸の捨石に腰うちかけながら、闇を流るゝ川水に對うて動がぬ人影、ぼッと提灯の火の通行の熊さン何心なく見れば、痩せたる横顔の面相、どこやら彼の星影先生に似たり、今年の浮世こゝに一切その最終を告げて、我身も天地間に運命の盡果てし星影先生、骨ばかりの膝頭に思案の腕を組上せて、たゞ茫然たる背後より不意に映す灯影もろとも唐突の聲、

『やッ、せゝ先生ッ』

はッと驚いて起ちしが、もはや飢死に間もない身體衰弱、よろ〳〵として其まゝ倒れし上より、走寄ッて抱起せし熊公の顏を見るや否、先生また今更の驚愕、頻りに藻掻いて遁出さんとすれど、あはれや起きて走るだけの力なし、

『じゞ實に、面目次第もない、どうか放して下さい今、こゝで今、この僕は兩度この面皮を見られる筈でなかッたから、寧ろ恩惠だ、たゞ賴む、放して貰ッた方が僕に取ッて』

『なゝ何ですい先生、さう遁げなくッても宜いぢやァありませンか先生、熊でさァね、見られる筈でねェに仕ろ、かう目ッけた以上ァ放しませンぜ、全體まァ、この押詰ッた年の暮に闇ン中で今時分、うすッ氣味の惡い、まッ闇な川面に對ッて茫然と何を考へてなさるンですい、兎も角も先生、わッしに隨いて御出なせェ、長屋ァ外の奴等に嫌でせうから、つい橋の先の居酒屋まで、實ァ今夜、少しぐれェ飲ンでも宜いンですよ、ハヽヽヽ、見て下せェ、こりやァ今夜の先生に對して言ふ理由ぢやァねェがね、この熊が生涯の一代記に書いてほしいンだ、今日の大晦日に人竝の伸し餅二枚を俥に積ンでさ、噂ァが年來の希望だ、小苦い一茶が四半斤に甘納豆の袋入が半斤、轅棒の先に鹽鮭一片ぶら下げて、まだ先生かういふ音がするンでさァね、がちやく〳〵、どうですい、六七貫は無事に殘ッてますぜ、御安心なせェ』

星影先生、いよ〳〵恥ぢて身の置どころもなく、またもや元の捨石に腰うちかけながら、顏もえあげず差俯いて聲を顫はしぬ、

『いや、芳志は實に有難い、これまでの僕と違ッて、今日は別人の如き僕だ、その僕が謹ンで感謝します、しかし、僕は不幸でも非運でもない、當然の理に於て今日かうなるべき筈の結果が迫ッて來てゐンだから、たゞ感謝するのみに止めて貰ひたい、もはや僕は社會に

存在する資格も人に慈恵をうける餘地も無くなッて仕舞ッた、此まゝ見捨てゝ置かれるのが却ッて僕のために自然の數だ、あゝ天を怨まず他を恨まず只こゝに我みづから我を憫笑するのみで譬ひ一時、助けられても到底その效果のない僕だ、この無用物に空しく時を費して折角の汗水に得たものを割くよりは、少しも早く歸ッて、實に尊敬すべき其、それこそ眞實の神聖物だ、その淸き美はしい物を彼、羨むべき淑德の細君に捧げて下さい、凡そ男女の愛といふ上に於て最も慘憺、最も殘忍酷薄なる實際に遭遇した僕が、悔悟の念と共に大に決心した今、こゝで事實かくの如き愛の美果を最も感謝すべき知人の現在に認め得たのは、せめての幸福だ、正しく神の示し給ふ敎訓であらう』

『だから先生、いけねェよ、さうなッて居て、まだ暢氣に、そンな分らねェ講談を始めるから物が間違ッて來るさ、とゝ兎も角こゝぢやァ仕方がねェ、面倒だ、お乘ンなせェ、ちよいと餅を膝に乘ッけてね、同じこッたよ、ハヽヽヽ』

淺草より撞出す除夜の鐘の音に、時も今年と來年の境目、闇を流るゝ筑波颪の川水に對うて、人も現世と未夜の境目、その星影先生の危ふき袖を片手に摑みつゝ、片手に俥の轅棒を握りながら、厩橋と吾妻橋の中間を右に折れし横町の居酒屋、いづれ今夜は徹夜の體なり、俥は其まゝ門口に捨置けど、大願成就の伸し餅と嗅アへの土產は運び込ンで、幸ひの鹽鮭を宙に吊しながらの大聲、

『あッ、面倒だがね、ちよいと火にかけてくンな、そして何か外に煑たもンでもありやァ、見つくろッて飯と酒だ』

繩暖簾のレースに一時の浮世を隔てゝ、空樽の椅子に長板のテーブル、御持參の鹽鮭に煮豆と燒豆腐の獻立、盛飯と熱燗の德利を前後に竝べて、まだ茫然たる星影先生に差對ひし熊公、